早稲田大学社会科学部
学部生・卒業生・教職員を繋ぐ
Communication Magazine

社学稲門会

WEB発行第5号

No.20

「社学二水会」会報
通巻20号

題字：第3代学部長
故木村時夫名誉教授

CONTENTS

特集●「社学稲門会報」第 20 記念号の発刊によせて

稲門会活動を楽しみながら更なる奨学基金の充実を！
社学稲門会会長／阿川　功 …… 2

「社会構想力」を有する社学出身者が世界で活躍する姿を夢見て！
社会科学総合学術院長／山田　満 …… 4

私が社学稲門会の皆様と歩んだ4年間！
社会科学部事務長／斉藤 鉄生 …… 6

『がんばれ！同窓生』～次世代に贈る言葉～』第５回

自分の強みを意識して複合化する努力を！
歴史小説家／伊東　潤 …… 8

奨学生紹介

社学で芽生えた夢を追いかけて／稲垣 里帆 …… 14

新社会人です！

新しく挑戦したいことが増えるように／柴田 香名 …… 16

学部創設50周年記念事業レビュー

『社学、いま・むかし、そして未来へ』を振り返って
社学稲門会副会長／夏越 英成 …… 18

第５回社学稲門会総会レポート

新たな役員体制で更なる躍動を目指して！
社学稲門会副事務局長／南雲 靖夫 …… 20

「社学稲門会」報告

奨学金委員会の具体的な活動 …… 22

第 24 回社会科学部合同クラス会のご案内 …… 23

ゼミリレー⑲大畑弥七ゼミ

人生の指針となった大畑ゼミでの２年間／隠塚　功 …… 24

寄稿・早慶戦観戦記

六大学野球春季リーグ戦早慶戦応援記／西宮 正明 …… 26

寄稿・WASEDA CLUB からのメッセージ

ワセダが果たすべき役割／後藤 禎和 …… 30

「社ガールの会」活動報告

早稲田と社ガールと私／井上 明美 …… 32

寄稿・紆余曲折

良き師、良き友に恵まれ、意義深い人生に…／原田 高雄 …… 34

「ブー、ブー、ブー！」でバブルを謳歌／和泉 明宏 …… 38

寄稿・東日本大震災復興支援イベント探訪

「REBORN ART FESTIVAL 2017」を訪れて／伏見 英敏 …… 40

編集後記

Come & join us again! Come & join us again! Come & join us again! Come & join us again! Come & join us again! Come & join us again!

「社学稲門会報」第20記念号の発刊によせて

社学稲門会会長
阿川　功

稲門会活動を楽しみながら更なる奨学基金の充実を！

暑い日が続きますが、卒業生の皆様・社学教職員の皆様・教職員 OB の皆様方には、ご健勝にてお過ごしのことと存じます。

「社学稲門会報」は、前身の「社学二水会報」から通算して 20 号を数えるに至りました。社学稲門会の活動は、二水会活動を含め 22 年の歴史をもちますので、そのほとんどの時代をカバーしていることになります。

社会科学部は、昨年、学部創設 50 周年を迎えました。社学稲門会は、その記念イベントを学部と共に担わせていただき、盛会裡に終えることができました。とはいえ「社学の応援団」としての社学稲門会は、まだまだ成長・充実の過程にあります。「卒業生奨学基金」もやっと 8000 万円になるところであり、親睦と相互啓発の場である稲門会の活動も充実してきてはいるものの、まだまだ皆で知恵を出しながら進めていかなければなりません。

私の考える稲門会の課題につき、ランダムにいくつか述べてみたいと思います。

①まず、社学稲門会の組織については、会費納入会員を増やさなければなりません。昨年が約 200 人ですので、これを当面 300 人にしたいと思います。特に会費の自動引き落としを利用してもらい恒常的に安定した財政基盤づくりを進めたいものです。その為には、「奨学基金」と共に「社学稲門会」の認知度を高める為の知恵を皆で出していかなければなりません。その 1 つとして、今、幹事長、事務局長、佐藤英明君達が卒業生のデータの整理を進めてくれています。奨学金の寄附実績者、総会、合同クラス会、50 周年イベントへの出席者等のデータを整理し、約 1000 人の卒業生には既にメールで情報発信できる体制にあります。また紙ベースでの情報も同数以上のものがありそうです。

卒業生の皆様には、日常的には社学稲門会活動に参加出来ない方も沢山おいでになります。そのような全国津々浦々の卒業生の皆様も、是非会費（年 3000 円）の納入を通して稲門会活動にご参加いただき、社会科学部や早稲田大学の動向を知っていただくと共に、社学から 1 人でも多くの有為な人材を輩出し、社学が創設 100 年に向け更に大きく発展するよう応援していただきたく、お願いを申し上げます。

②馬場さんが中心になってつくった「社ガールの会」は、社学稲門会活動とは若干距離を置きつつも、社学卒業生の女性達の集まりとして充実してきています。今年からは山野さん、井上さんが中心になって進めてくれています。

③「社学経営者の会」は、川尻、石田、井上君達が牽引してくれていましたが、今年は井上君と私が中心になって「社学の応援団」にふさわしい存在にしようと考えています。今、その為のベースのデータを集めていますが、上場企業を含め約 50 人の経営者データが集まったところです。これから皆さんに面会していく予定です。

④毎月の定例会の出席者は、現在常に 30 人位ですが、これを 50 人位にしたいものだと考えています。定例会と懇親会の場が「親睦と相互啓発」の場になるよう、社学の先生方のご専門の話を聴いたり、メンバーの皆さんの経験を踏まえた話を聴くなど、知的刺激も絶やさないような会にしたいものです。

⑤「楽しくなければ社学稲門会ではない」をモットーにしている社学稲門会ですが、昨年までは「50 周年を成功させよう」と、それを中心に全員が力を合わせてきました。今年からは又「楽しい稲門会」づくりに取り組んでいきたいものです。小瀧君達が主体になってすすめてくれている早稲田スポーツ、WASE OKE を楽しむ会のほか、西宮君はゴルフの会を、伊東君は温泉の旅を、井上君は去年は赤穂浪士ゆかりの地をめぐる会を催してくれました。今年も沢山の楽しい企画を出していただき、遊びも大いにやりたいものです。

社学稲門会は、卒業生の親睦と相互啓発をはかりながら、奨学基金を中心に社学の応援団として「学生、教職員、卒業生」の三位一体の会を目指しています。

中本君は、上場企業で 30 年に渡り人事を担当された知人を講師に、山田学術院長のご理解を得て、斉藤事務長と現役学生の為の「就活ゼミ」を具体化してくれました。売手市場ということもあり、残念ながら受講生は 1 名でしたが、受講した女子学生からは、終了後大変有意義だったとの感謝のメールが届きました。学生、教職員、卒業生の三位一体の会の具体化、そして実のある形にするのは容易ではありませんが、それを志向しながら、まずは卒業生は勿論教職員の方、学生へ社学稲門会の認知度を高めるという第一歩から、急がず休まずやっていきたいと思います。

社学稲門会活動は、一貫して卒業生である我々が、稲門会を楽しみながら奨学金を充実していくことが何より大切です。次の目標は、奨学基金 1 億円です。

どうぞ皆様、これからが暑さ本番、呉々もご自愛のうえご活躍下さい。

「社学稲門会報」第20記念号の発刊によせて

社会科学総合学術院長
山田　満

「社会構想力」を有する社学出身者が世界で活躍する姿を夢見て！

このたびは、「社学稲門会報第 20 記念号」のご発行、誠におめでとうございます。「十年一昔」という諺がありますが、20 年ですから、この間の歳月の流れを考えますと、稲門会の皆様各人におかれましてもきっと感慨深いものがあるかとご推察いたします。

ご存知の通り、社会科学部も創立 50 年周年という大きな節目を昨年迎えることができました。1966 年に創立した社会科学部（社学）ですが、50 年の重みを感じざるを得ません。夜間部からはじまった社学も、昼夜開講学部へ、さらには 2009 年からは完全昼間部に移行し、その軌跡を考えるだけでも歴史を感じます。この間の、阿川功様をはじめとする社学稲門会、校友の皆様のご支援に対して、心より感謝申し上げるしだいです。

さて、今回私は社学の責任者として記念すべき稲門会報に「社学の未来に向けたメッセージ」を寄稿する機会をいただいたわけです。次の 10 年先、20 年先、さらには 50 年先に「社学は早稲田大学でどのような立場を築くのか、いや早稲田を超えていかにあるべきなのか」。さすがに 50 年先の社学の未来像を語ることは、現代社会の複雑な国際関係を専門にする私にとって、困難を極める、想像力を超えたテーマと言えます。

しかしながら、すでに社会科学部が「早稲田あっての社学から、社学あっての早稲田」にその立場を築き上げてきたことを、自信をもって皆様にお伝えすることはできます。社学が掲げている「国際化」、「社会化／臨床化」、「学際化」の三つの理念は、現代の国際社会にもっとも求められる資質であるからです。2032 年に向けた「早稲田ヴィジョン 150」における社学の将来構想はすでにホームページで明らかになっております。「社会を理解し、社会を構想し、社会を創生する実践的アカデミズムの追求」であります。それは「社会構想力」を有した人材の育成として収斂されます。

このような長期的ヴィジョンに基づき、現在取り組んでいる社学の計画を上記三つの理念に基づき皆様にお知らせしたいと存じます。まずは学部の国際化を大きく進める英語プログラムの再編です。すでに 2011 年から現代日本学プログラム（CJSP）を展開し、毎年 20 名の留学生が社学に在籍して英語で講義を受けていますが、18 年度からはソーシャル・イノベーションを掲げた TAISI（「大志」を抱いて欲しいという願いが込められています）プログラムが始まり、19 年度からは現在の 20 名の定員から 60 名へ定員が大幅に増員するプログラムが社学にできます。

この TAISI プログラムは、留学生のみならず、グローバル入試という制度を導入して「英語に自信が

ある」日本人受験生にも開かれた画期的なプログラムです。すでに社学独自の「全国自己推薦」入学試験同様に日本国内外の優秀な学生が社学に集ってくることは想像に難くないと確信しております。また、TAISI プログラムは、社学の一般プログラムとの壁を取り払い、相互に交流する「内なる留学」プログラムとして充実させていきます。

さらに、海外大学との新しい留学プログラムを社学独自で開発しています。中国の武漢大学外国語言文学学院や東ティモール国立大学社会科学部との箇所間協定を結びました。北京大学への中期留学、国立台湾大学との学生交流もすでに展開されています。現在は、国際部・留学センターの支援のもと、日越大学構想への参加、五大湖・中西部私立大学連盟のホープ・カレッジへの研修プログラムの開発など、欧米大学のみならず、アジアに強い早稲田の強みを生かした中国の大学との連携、東南アジア諸国の大学との学術協定を結び、学生間の交流を行なっています。

また、学部・大学院の連携、大学院と 2016 年 3 月に附置研究所として設立した先端社会科学研究所との連携も進めています。大学院改革に併せて、学部 3 年修士 2 年の学部修士一貫プログラムの導入も検討しております。学部生や大学院生が英語で学ぶグローバルラーニングも導入し、上記留学の促進のみならず、海外や国際機関、国際協力機構（JICA）との連携に基づくインターンシップの導入もはじめています。大学院では、中国トップ大学の一つ清華大学社会科学院とのダブルディグリープログラムを社学独自で新設しました。

このように、社学の目指す三つの理念で育った学生たちは、様々な分野で活躍していくことになるでしょう。昨年の記念式典で皆様に配布されました冊子「社学 50 年　それぞれの足跡」でインタビューされた先輩諸氏に続く、卒業生たちが確実に育っていることがご理解いただけるのではないでしょうか。複雑な様相を呈する国際社会、国際社会のなかで日本が置かれている立場は益々困難を極めていくと推察されます。しかしながら、社学が目指す「社会構想力」を有する人材、つまり社学出身者が、平和、開発、人権、環境などの分野で必ずしや、指導的立場で諸問題解決への第一線で活躍していく姿が想像可能ではないでしょうか。

最後に、改めまして「社学稲門会報第 20 号」の発行おめでとうございます。本記念会報の寄稿を通じまして、社学稲門会の皆様の益々のご活躍、またご健康を祈念いたしまして、社学教職員を代表しまして、ご挨拶と御礼を申し上げるしだいです。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

社会科学部事務長
斉藤　鉄生

私が社学稲門会の皆様と歩んだ4年間！

――社学創設50周年記念事業を振り返って――

この度、社会科学部稲門会報の 20 号記念号発刊にあたり、社会科学部事務長としてお祝いを申し上げますと共に、私の社会科学部稲門会（以下、社学稲門会）に寄せる想いをお伝えいたしたく寄稿させていただきました。

私が事務長の役割を任されたのが、2013 年 12 月 1 日であり、その時から阿川功稲門会長をはじめとした社学稲門会の皆様と共に、社会科学部（以下、学部）の更なる発展のため、微力ながらお手伝いをさせていただくこととなりました。

社学稲門会は発足当初から、「社会科学部に係る者の親睦」と「社会科学部卒業生奨学金の充実」を会の目指すべき二本柱として掲げられています。毎年、社学稲門会のイベントとして実施されている春の総会・懇親会、そして、秋の合同クラス会においては、「社会科学部に係る者の親睦」が継続的に図られています。また、「社会科学部卒業生奨学金」とは、毎年 4 名の学部現役学生に年額 40 万円の奨学金を給付している奨学金制度であり、この原資を充実させるための募金活動が、社学稲門会を中心として積極的に推進されています。

2016 年に学部創設 50 周年を迎えるにあたり、50 周年記念事業の企画・実施を通して社学稲門会の目的を実現するための活動は更に大きく花開くことになりました。

2014 年の秋、社学稲門会に「50 周年実行委員会（佐藤和美委員長･現事務局長）」が設置されました。この委員会では何度となく記念事業についての検討が重ねられたと伺っておりますが、その結果、社学稲門会として次のような記念事業が展開されることになりました。

まずもって社学稲門会の記念事業の柱として据えられたのは、会の目的としても定められている社会科学部卒業生奨学金の募金活動を強力に推進することでした。具体的には寄付金の総額を 8,000 万円の大台に届かせるべく「奨学金委員会（川尻光昭委員長）」により様々な施策が講じられました。その結果、2015 年から 2016 年の 2 年間で募金額は飛躍的な伸びを見せ、最終的には 8,000 万円にもう一息のところまで到達しました。そして、学部創設 50 周年（2016 年）には、次のような記念イベントが社学稲門会によって開催されました。

●斉藤鉄生（てつお）さんプロフィール
早稲田実業学校出身。
1985 年 3 月早稲田大学教育学部卒業。
高校・大学を通じてバレーボール部に所属。1990 年から 3 年間早稲田大学バレーボール部の監督を務める。
1985 年 4 月早稲田大学専任職員として就職。総長室調査役・総長室校友課長・学生部奨学課長・学生部学生生活課長などを経て 2013 年 12 月 1 日に現職。

① 2016 年 5 月 14 日（土）3 人のレジェンドが語る早稲田スポーツ

ア式蹴球部 OB の松永章さん、野球部 OB の望月博さん、ラグビー蹴球部 OB の後藤禎和さん（いずれも社学卒業生）を迎えて、早稲田スポーツについてパネルディスカッションが行われました。一時代を築いたお三方からは、現役当時の苦労話や、これからの早稲田スポーツに期待することなど、興味深いお話を伺うことができました。

② 2016 年 10 月 22 日（土）社学、いま・むかし、そして未来へ

当日は、キャンパスツアー、田村正勝名誉教授の特別講義「社会科学方法論」、記念シンポジウム「わたしと社学、次世代への提言」といったプログラムが開催されました。キャンパスツアーでは、不肖斉藤もツアーガイドとしてお手伝いをさせていただきました。また、特別講義では、久方ぶりの「田村節」が観客を魅了しました。記念シンポジウムでは、社学卒業生の津田大介さんがコーディネーターを務められ、大いに盛り上がりました。

③ 2016 年 10 月 23 日（日）社会科学部創設 50 周年記念式典・懇親会

記念式典は学部が主体となり開催しましたが、その中では、これまでの社学稲門会の奨学金募金活動に対する感謝を込めて、山田満学部長から阿川功稲門会長に対して感謝状の贈呈がありました。また、懇親会は夏越英成事業委員長（現副会長）の指揮の下、校友・学生・教職員も相まって、とても華やかな記念パーティーとなりました。

いずれの記念イベントも、これまで培われて来た社学稲門会の結束力・総合力により大成功を収めました。また、これらの記念事業に関する一連の情報を発信するために、ホームページの充実やポスターの作成等を担当された広報委員会（伏見英敏委員長・現副会長）の役割はとても重要だったと言えるでしょう。

そしてなにより、記念事業のみならず、この間、社学稲門会の活動全体を縁の下の力持ちとして支えて来られたのは藤瀬敏彦事務局長（当時）だったのではないでしょうか。

私自身は、これまでの 4 年間という社学 50 年の歴史の中のほんの一時期にお手伝いをさせていただいたに過ぎませんが、社学稲門会は今後とも発足当初からの理念を大切にされ、学部の更なる発展に力を尽くされることに僭越ながら大きな期待を寄せるところですし、私自身も引き続き、ご一緒させていただければと存じております。

社学稲門会の更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。

★OB・OGインタビュー★

『がんばれ！同窓生』～次世代に贈る言葉～』

第５回

歴史小説家

伊東　潤 さん（1983年卒）

自分の強みを意識して複合化する努力を！

今の早稲田の社学生は、30 年以上も前に卒業した我々の時代よりはるかに優秀でしっかりした人が多い反面、不透明な社会にあって心の折れやすい人達も増えてきているのではないでしょうか。

当企画は、各界でご活躍されている卒業生にお話を伺い、社学稲門会の facebook やホームページでその活動をご紹介すると共に、卒業生から若い世代の方々にエールを送っていただくという趣旨です。今回は、ビジネス界から歴史小説家に転身されご活躍中の伊東潤さんに力強いエールをいただきました。

（文責：伏見英敏）

●早稲田大学時代

～我々の年代の仲間の多くは、毎日のように早稲田に足を運んだけれど、悪友に阻まれなかなか教室にたどり着けなかった人が多いように思いますが、伊東さんはどんな学生生活でした？

伊東：僕は、社学と二文の学生だけの軟式野球部に所属していたので、哲学堂のグラウンドで週３回午前中に練習してから大学に行きました。当時の社学は一時限が２時 10 分からでしたからね。練習は午前中でした。授業に出ない時は、文明堂でマージャンというパターンです。まあ、自慢できない学生生活は皆と同じです（笑）。

～横浜スタジアムで売り子のアルバイトをしていたというのを聞いたことがありますが……。

伊東：そうですね、バイトには、４年間ほぼフル出場していました……ということは授業にはあまり出てなかったのかな（笑）。

～同年代の仲間の話では、当時の社学は早稲田で一番入りやすくて、一番卒業しやすい学部だったじゃないかと……。

伊東：そうですね、軟式野球部の仲間にも、優が 30 個超の人間がごろごろいたので、採点は割とゆるかったかも。僕の成績も悪くはなかったです。当時の社学は、ほかの学部に落ちても早稲田に入りたいという人が多かったので、一浪や二浪はざらでした。

学生時代の僕は、現役で入学したせいもあって、周りの社会人組や浪人組のいわばアニキのような人たちについていくという感じで、全然自覚を持ったタイプ

じゃなかったですね。カンニングも派手にやっていましたよ（笑）。

～どなたか印象に残る先生はいらっしゃいますか。

伊東：自分自身がまだ幼かったので、授業に感銘を受けて記憶に残る先生はあまりいないですね。ただ、中野正剛先生のご子息の中野泰雄先生は厳格な方で、ものすごく良いことをおっしゃっていた気がしました。どんなことを言っていたのかは覚えていないんですけど（笑）。

～早稲田界隈でよく行ったお店の思い出はいかがですか？

伊東：高田馬場で飲む機会が多かったですね。サカエどおりの入り口に『てっぽう』という焼き鳥屋があって、軟式野球部のたまり場になってましてね。ついこの前まであったんですが、失火で焼けてしまったんです。幸いにしてけが人はいなかったんですが、マスターもいい年ですし、今後を思うと心配です。

～戸山町界隈には、下宿が多かったですね～。

伊東：４畳半とか３畳の古い下宿がすごくたくさんありました……。人の住むようなところじゃなかったです。坊ちゃん育ちだったので、とてもカルチャーショックを受けました（笑）。

～布団が一組しかない友人の下宿に押しかけてよく泊めてもらいました。

伊東：狭い部屋に何人かで壁にもたれかかって平気で寝てましたね。夜中に起きて下宿のトイレに行くのは怖かったです。町中なのに何かが出てきそうで……。

～お店も金城庵や三朝庵のような老舗はかろうじて残ってますが、南門どおりも西門どおりもずいぶん入れ替わりました。この季節だと７時くらいになると大隈講堂に灯がともりますが、我々の時代だとようやく人が動き始める時間でも、今やそのころにはもう学生はいないです。

伊東：そうなんですか。最近の若い人は皆、飲まずに帰っちゃうと聞きました。我々の時代とは全然違いますね。うちの息子も日大の理工学部に行ってますけど、いつも早く帰ってきますよ（笑）。

～早稲田の自由闊達でバンカラなイメージに憧れて入った人も多かったですね。すごく年上の先輩や同級生がいたり、豪快に酒を飲む人が尊敬されたり、中退の方が有名になれるという変な都市伝説みたいなものがありましたよね。

伊東：そういえば「いつの間にかアイツいなくなったな」なんて人が結構いました。今思うと不思議ですよね。３年ぐらいになると、見かけなくなる人がざらにいるんですよ。あの人たちは今、どうしていることやら。

～よく言えばダイバーシティ的でいろんな奴がいて面白かった。

伊東：実は僕は、早稲田に憧れていなくて、社学しか受験しなかった。明治や立教にも合格したんですが、それでも「早稲田ってなんかカッコイイな」と思って入りました。入学後に「えっ、午前の授業ないの？」みたいな感じでしたね。まあ、良くも悪くものんびりしていたんですよ。

～昨年、学部創設 50 周年でしたが、私たち 1979 年入学組は、14 期生でまだまだ歴史が浅かった。

伊東：えっ、14 期生ですか？　初めて知りました（笑）。そんなに歴史が浅かったんですか。

●就職そして転職

～卒業後のお仕事についてお話いただけますか。

伊東：新卒で東芝テックに就職して、２年後に新卒同然の扱いで IBM に転職しました。テック時代は主に POS 関係の仕事ですね。IBM には 10 年くらいいました。IBM にいると、外資系の IT 企業からヘッドハンティングに来るんです。35 歳の時、外資系の人材エージェントの提示する条件がいいので、ドイツの SAP に移りました。SAP はとても良い会社でしたが、その後もヘッドハンティングで３社ほど移りました。

　でも、このままじゃ、外資系渡り歩きのチーママ状

態なので、スキルを付けるべく、一念発起してコンサルティングファームに入り直しました。そこでコンサルタントとして、企業戦略やサプライチェーン・マネジメントの修業を積んだのですが、この経験が今に生かされています。

しかし組織人を20年近くやってきて、つくづく自分は人と一緒に何かやることが向いていないと覚りました。コンサルタントもクライアントがいますから、思った通りにはいかないんですよ。やはり自分の適性を生かすには、自己完結の仕事しかないと思い始めました。

その後、友人と小さなコンサルティング会社を起業して結構うまくいっていたんです。IT業界でお客さんにソリューションを売り込む企業がありますよね。そこに行って若い人をコーチングするんです。製造業の現場に一緒に行って、サプライチェーン・マネジメントの提案をするとか、このお客さんにはこういう問題があるからこういう提案をしなくちゃいけないというように、共同で提案書を作ったり……。ニッチな仕事なので競合もあまりいなくて結構好調だったんです。ところが2008年のリーマンショックのあおりを食らい、5～6社あったクライアントすべてから切られてしまいました。

～あれはすごかったですね～。

●運気の〝流れ〟と人生の勝負どころ

伊東：それでも何とか会社を続けようとしました。ところが、巡り合わせが悪くて新しいコンサルティングの契約が取れない。つまり〝流れ〟が非常に悪くなっていくんですよ。これまでなら絶対契約してくれるはずのお客さんでもダメになることが続いて……。

一方で、既にその当時から書き始めていたんですが、作家の仕事はいろんな偶然が重なって、とてもうまく行き始めたんです。当時、子どもを2人私立の小学校に通わせていたので非常にリスキーだと思いましたが、作家の方に傾き始めた〝流れ〟を選んだんです。「ここは人生の勝負どころだな」と思ってね。

～それが2009年ごろですね。

伊東：そうですね、完全に専業になったのは2010年です。

～勝負の引き金になったのはなんですか。

伊東：今申し上げたように、〝流れ〟が作家の方に傾き始めたと感じたからです。実は流れが来ているのに、過去に決断できなくて後悔した経験がありまして……。1990年、日本オラクルができたばかりの頃、友人に強く誘われたんですが、結局行かなかった。その頃、オラクルに行った連中は、ストックオプションで大金持ちになったんです。役員になった人もいます。自分としては、あそこで勝負をかけられなかったことに悔いが残っていました。つくづくチャンスは何度もやってくるものではないと思いました。若い時は、またのチャンスは来るさと思い、今回は見送っておこうと思いがちですが、人生の大きなチャンスなんて、多くても3度ぐらいしかありません。

●コンサルティング手法で自分自身の分析

～歴史小説のジャンルを選択した背景はなんですか。

伊東：自分自身がコンサルタントでしたから、小説の世界に身を投じるにあたり、自分なりにどう差別化をするかを考えました。具体的に言えば、誰かの空いたシートに座れるかどうかを考えたのです。

当時は、司馬遼太郎さんとか吉村昭さんとか池宮彰一郎さんとか、歴史小説のレジェンドと言われていた人たちが90年代後半から2000年代にお亡くなりになっていました。安倍龍太郎さんや火坂雅志さんたちはいらっしゃいましたが、シートは十分に空いていました。

歴史がすごく好きとか得意というわけではなく、正直な話、そういう戦略的観点から入ったのです。ですので、よく誤解を受けるのですが、私は面倒くさいことが好きな歴史オタクではなくストーリーテラーなんです。

～面倒くさいこととは？

伊東：歴史小説家というのは、面倒くさがりな人が多いので、一次資料など当たらないんです。つまり人間ドラマばかりを書きたがるんです。史実あってのドラマなので、私は労をいとわず調べましたね。それが初期の差別化要素かな。

～作家としては後発だからといって、時間のかかることは避けた方が良いと言うわけではないのですね。

伊東：株式投資の世界に「人の行く裏に道あり　花の山」という格言がありますが、それと同じで、人と同じ道を行ってはいけない、人のつけた轍の跡は進まないというのがポリシーなんです。

インタビュー中の伏見編集委員（左）と伊東潤さん

～まさに差別化ですね。

伊東：何をするにしても差別化していかないと、これからの時代は生き残れません。差別化とは、つまり自分の強みを見つけることです。小説家になるにあたり、自分の強みとは何か、いかに独自性を打ち立てていくかを、コンサルティング時代に会得した手法を使って考えていきました。

そこで出した答えが、歴史解釈力とストーリーテリング力の融合です。単に歴史解釈力だけだったら大学の先生とかプロの研究家に敵わないですよね。一方、ストーリーテリング力だったら、宮部みゆき氏や伊坂幸太郎氏といった天才には敵わない。

だけど歴史解釈力とストーリーテリング力の融合という２つの強みがスパークするポイントだったら、今の日本の作家で、僕に勝てる人は誰もいないですよ。つまり１つだけの強みでは勝てない世界も、複数の強みの融合なら、勝ち目が出てくるんですよ。

～なるほど。

伊東：もちろん事前に、そこにお客さんがいるかどうかをマーケティングしておかねばなりません。歴史小説は今でも十分に需要がありますし、忍者や剣豪が縦横無尽の活躍をするものよりも、斬新な歴史解釈のものを読みたいという読者は数限りなくいます。

●自分の強みを複合化することが大切

～最近の学生さんは、英語くらいは使えるのが普通でしょうけれど、それだけでは強みにならない。

伊東：そうですね、強みは１つだけだったら、上には上がいるから勝てないんですよ。野球に「走行守三拍子そろった選手」って言葉があるように、何か１つに秀でているよりも、野球に必要な３つの要素がそろっている選手の方が、重視されるのと同じです。

強みを複数持つことで自分がオンリーワンになれる。わかりやすく言えば、英語だけじゃなくてドイツ語とかフランス語ができるとかね。プラスで何かを持つということです。

知り合いで早稲田の文化構想学部に所属する学生がいるんですが、将来は編集者としてやっていきたいと言っている。だけど編集者には、すごいセンスや技術を持った人たちがわんさといる。ただ、彼はITに強いんですね。今やSNSを使っていろいろな宣伝をする時代ですから、彼の得意なITと編集の２つの強みを持っていたらオンリーワンになれるよって言ったら、天啓のように喜んで、そこに絞り込んでスキルを付けていったので、今はどんどん成長してますね。

～なるほど、今のお話は、学生だけでなく次のステッ

プを考えている人にもとても参考になりますね。まず強みを意識する、そして強みを複合化するですね。

伊東：その通りです。複合化とか融合によって、新しい何かを生み出すこともできます。小説でいえばジャンルですね。自分では意識していないんですが、私の作品は「新しい時代の歴史小説」と呼ばれています。すでにフォロワーも現れるほどで、そいつらの方が文章がうまかったりします（笑）。

何事もパイオニアが勝つとは限らないので、今は気を引き締めています。とくに作品を出すからには、「ハズレなし」を心がけています。たまにホームランを打つより、常にヒットで出塁する。こんな体型で言うのも何ですが、私は打率重視のバッターですよ。

～簡単ですか……？

伊東：ハズレを出さない方法は簡単です。一流の作家でもハズレを出すことがあるのは、「こいつは面白そうだな」って思いつきの題材に飛びつくからです。

自分の強みを生かした題材を選んでいけば、ハズレは出ません。

これは、先ほど話していた「作家（人間）としての強み」とはまた別の「題材的強み」ですが。

例えば、僕の題材的強みは〝躍動感〟と〝海の描写〟です。それを生かして戦国時代とは別の題材を描こうと思い、古式捕鯨という題材に出会いました。そして『巨鯨の海』や『鯨分限』という代表作をものにすることができました。

～なるほど、なるほど。

伊東：ただし、小説をこうした理論で語ってしまうところに、自分が直木賞を取らせてもらえない理由があるのかもしれません（一同爆笑）。しかし読者が楽しんでくれれば、それでいいんです。

～直木賞の話が出ましたが、これまで５回ノミネートされてますね。

伊東：この賞は取れていませんが、これまでにプロ同士の戦いで、候補名が挙がったもので６つも文学賞をもらっているので、まったく気にしていません。単に巡り合わせの問題でしょう。

～選考委員にとって小説というのは技術的なものというよりは感性的なものということですね。

伊東：それが主流の考え方です。小説家にとって神秘性というのは大切ですが、エンタメ文芸はスキル95%ですよ。仕事方法を習得できれば、まあ、誰にでもとは言わないまでも、そんなに困難なものではありません。

～今一番新しい単行本は『城をひとつ』ですか？

伊東：そうです。

～主人公の大藤信基という人は実在した人物ということですが、これまでこのような人物はあまり題材にならなかったのではないですか。

伊東：そうですね、調略戦すなわちスパイゲームというのは、なかなか題材として取り上げられませんでした。なぜかというと、すぐに発想が忍者に行ってしまうからです。

～ある種のマーケティング戦略ですね。

伊東：諜報戦のようなものを書いてみようと思ったんです。もう読者が忍者には飽きたんではないかと。

～そうなんですか。

伊東：いい加減、トゥーマッチでしょう。忍法の技が過激になるだけで、最近の忍者小説はリアリティが薄れています。それよりも僕はリアリティある歴史小説を書きたい。それも登場人物の痛みや葛藤を読者が共感できるものをね。

～ちょっと立ち止まったり、行ったり来たりするところがあった方がいいわけですね。

伊東：あった方がいいんです。現代を生きる我々と同じように、当時の人も悩んで壁を乗り越えていったわけです。そうした苦闘の姿を描いていきたいですね。少し前に出した『江戸を造った男』などは、それが結実したものです。

●客観的な自己分析と教養を高めること

～これまでお話いただいた内容も十分若者へのエールに思えますが、改めて次世代に贈る言葉をいただけますか。

伊東：まず己を知ること。己を客観的に知らないと、人生の勝負はかけられません。どうも今の若い人たちは、自分の力量を高めに見積もり過ぎています。我々の世代と比べると、万能感を持ちすぎですね。

これからは、政治でも経済でもビジネスでも混迷の時代が来ると思うんですね。でも混迷の時代というのは、逆にチャンスが多い時代です。そのチャンスをどう活かして行くかは本人次第なんですけど、何を措いても日頃の準備がすごく大事です。自分の仕事に関する勉強、人間関係、そして教養を高めていく努力。

ライフネット生命の出口治明さんも常に言っていますが、これからビジネスや経営に携わっていく上で教養がすごく大事です。無駄なようであって、実はそこに教訓の山がある。僕の仕事からすると、歴史から学ぶことがあまりにも多いので、皆さんにも歴史をもっと勉強して欲しいです。なぜ同じ間違いを繰り返すのか、それは歴史から学んでないからです。若い人は、とくに歴史から学んで欲しいですね。

～日本の歴史は、明治以前と維新後がブチッと切れていて前の時代を参考にしない風潮があったのではないでしょうか。

伊東：というか、歴史から何が学べるかをしっかり書いたものがないんです。僕は『敗者烈伝』という著作で、25 人の敗者の敗因を書いてみました。敗者には様々な敗因があるんですけど、そういったものをしっかり勉強してもらえれば、必ず役に立つと思います。

～今の学生でもこれまであまり頑張っていなくて「しまったな」と思っている人もいるかもしれませんが、「not too late」の精神で気合を入れて勉強し直して欲しいですね。

伊東：おっしゃるとりですね。僕もキャリアパスの大転換を図ったのは 50 歳の時です。自分なりの戦略をしっかり持ち、地に足をつけた努力ができるなら、何事にも遅いということはありません。

特にこれからの時代は、ドンドン新しいものが出てくると思うので、ある意味下克上ができる時代です。私の業界で言えば、今一番売れている人、たとえば東野圭吾さんには 2005 年時点では、勝てる可能性なんか皆無ですよ。ところがこれから SNS が出てくる、

「志乃ぶ」にて吉田広報委員長と

社会科学部稲門会第５回総会にて

電子書籍のプロモーションの仕方なんかも日々変わってきていきます。コンテンツ・ビジネスの最前線にいる人たちは、もっとも効果的なプロモーションの仕方を日々、仮説検証しています。そうした時代だからこそ、下克上が可能なんです。

～社学稲門会は最年長でも 70 歳前後ですが、今のお話は若い人たちだけでなく、全ての同窓生に向けたエールと言ってもおかしくないですね。

伊東：僕は、いくつになっても元気で書けるという状況なら、書き続けるつもりです。大家や大御所に収まるつもりはありませんし、いくつになっても、誰にも負けたくないという気持ちで書いていくつもりです。まあ、見ていて下さいよ。

～本日は貴重なお時間とお話をありがとうございました。

[あとがき]

伊東潤さんは、低音で艶のある美声でこちらの拙い質問にも丁寧にお答えしてくださいました。自分の強みを意識して複合化すること、好機をつかむために日々研鑽することなど、若者たちのみならず中高年にも響くお話です。インタビューが終わってから懐かしい夜の早稲田をそぞろ歩き、「志乃ぶ」へ到着。吉田広報委員長、新谷副委員長とともに楽しい懇親のひと時を過ごしました。

また、６月３日に行われた社会科学部稲門会第５回総会においては、特別講演をお引き受けいただき、参加者に大いなるエールを送っていただきました。今後ますますのご活躍を期待しております。

奨学生紹介

稲垣　里帆
4年生

社学で芽生えた夢を追いかけて

●奨学生として貴重な経験ができて

1年の秋に奨学生として採用していただきました。母子家庭であり家計状況がかなり苦しくあったため、親と姉妹そろってとても喜びました。その時に学生生活は学業と社会勉強に注ぎ、1秒たりとも無駄にすまいと決意しました。

また、大学の奨学金は他にもありますが、社学の奨学生にしか得られない経験ができたことにも感謝しています。認定証授与式で初めて稲門会の存在を知り『社学愛』に触れました。とても緊張していましたが、あの時の歓迎ムードは今でも覚えています。

それからというもの三位一体の運営理念に共感し、しばしばイベントや集まりに顔を出させていただきました。人生経験豊富な卒業生の皆さまの話を聞けたこと、また普段の活動を応援してくださったことが非常にありがたいものでした。

現役の学生で稲門会の存在を知らない人はまだまだいるので、来年からは学生に近い社会人として微力ながらも稲門会に関わっていきたいです。

●サステナビリティの勉強のため米国留学

現在、留学準備の真最中です（※7月28日に出発しました）。就職するまでの約半年間、自然保護先進国のアメリカの大学でサステナビリティについて勉強してきます。

それまでの経緯は大学1年生にさかのぼりますが、今まで環境サークルでエコツアーの運営をし、自然保護・生物多様性・地方創生について考えてきました。まさかこんなことになるとは予想しませんでしたが、4年間で13回も佐渡島に行っていました。

演奏会の写真(右上)

というのも、素晴らしい景色と食べ物があり人の温かさに触れられる環境に魅せられたからだと思います。佐渡の景色や日本の里山を守るにはどうしたらよいのか考え続け、環境問題に強く関心を持つようになりました。

しかし環境問題は、日本の問題だけ考えるのでは不十分で、世界の若者と話せる機会に積極的に飛び込んでいきました。そういう場で自分がいかに情報から隔離されているかを知ったことで、アカデミックで本場の英語力を身に着けること、環境科学や持続可能性について勉強するために、残りの時間を海外で勉強すると決意しました。

環境ロドリゲスで看板を製作

「エコツーリズムの勉強をするためにイルクーツクにいます」

●卒業後はコンサルタントとして外資系へ

卒業後は外資系会社のコンサルタントとして働く予定です。意思やアイデアをより早く・効果的に実現させたいと思っており、実現したいと思っている人々をサポートできる環境に近づくことができました。そして、いつかビジネスを通して環境問題を解決させたいと思います。

早稲田には、夢を追っている人がたくさんいて同じくらい応援してくれる人がいます。その環境に４年間身を置き、存分に学生生活を謳歌させていただきました。大学生活の歩みを決めるのに重要な時期に援助していただいたこと、そして４年間支えて下さったこと、とても感謝しています。

早稲田の杜に集い、はや散じていく身の上ですが、これからも理想を求めて精進して参りたいと思います。

●稲垣里帆さんプロフィール

神奈川県横浜市出身 2018 年卒予定の稲垣里帆です。政策科学の上沼ゼミで生物多様性農業の促進政策について研究しています。サークルは環境ボランティアサークルの「環境ロドリゲス（通称：ロド）」と、「早大交響楽団（通称ワセオケ）」に所属していました。現在は外部団体で政策提言等の環境活動を続けています。

「社会科学部稲門会」入会のご案内

社学稲門会では入会受付を常時行っております。社学稲門会ホームページの会員入会受付フォームにて入会手続きをお願い申し上げます。個人情報は厳正に管理いたします。入会手続きと同時に会費の納入をお願い申し上げます。

会費：年間 3,000 円、別途、任意で本会への寄付金一口 1,000 円（二口以上も可）を承ります。

ご寄付頂いた会員のご芳名を会報等に掲載いたします。匿名希望の方は「匿名希望」とご記名下さい。

会費納入方法：銀行振込

三井住友銀行　新宿通支店 (661)　普通口座 9218220　口座名：早稲田大学社学二水会　代表　阿川　功

みずほ銀行　新橋中央支店　普通口座　2231241　社会科学部稲門会

ゆうちょ銀行　記号 10120　番号 73833861　社会科学部稲門会

（振込時記入例：早稲田桜子　会費と寄付　匿名希望）

新社会人です！

柴田　香名
2017年卒

母のように年を重ねるごとに新しく挑戦したいことが増えるように…

●PR会社で情報発信の仕事を

３月に早稲田大学を卒業して早数ヶ月。現在はPR会社に勤務し、クライアント様の情報発信をお手伝いしています。PRとは、テレビCMのような広告活動ではなく「広報活動」のこと。ニュースリリースの配信、記者会見、取材対応などを通して、メディアへの掲載、ひいては一般大衆への認知拡大や信頼獲得を目指すことが主な仕事です。

あまり知られていないこの職業を志したきっかけは、３年間打ち込んだサークル活動にありました。学園祭の運営を担うそのサークルでは、主に情報発信や取材対応などの広報活動を担当。これが非常に面白く、ゼミも言語とメディアを研究する笹原宏之先生のゼミを志望するほどでした。

正直、広報や広告といった華やかな世界は性に合わないと思っていましたが、一見派手そうなビジュアルの裏にある地道な思考の積み重ねに心惹かれ、この職業を志しました。勉強はもちろん（というか勉強そっちのけで）サークル活動に本気で取り組む早稲田の自由な校風が、今まで考えたこともなかった道を示し、選ぶ勇気をくれたのだと思います。

●社会人になって変化したこと

「人間が変わる方法は３つしかない。１つ目は時間配分、２つ目は住む場所、３つ目は付き合う人である。」という名言があります。早稲田大学理工学部出身の経営コンサルタント、大前研一さんの言葉です。起きている時間の約半分を仕事に割き、職場の上司や先輩方、クライアント様とお付き合いする社会人となってから、大きく変化したことは３つあります。

まず、時間に対する考え方です。今までは、レポートやプレゼンテーションなど何か資料を作成する際、腰を据えて何時間もかけて仕上げていました。しかし、社会人が仕事にかけられる時間は１日８時間・週５日しかありません。他の仕事もある中で、いかに効率よく早く仕上げるかが勝負です。近頃働き方改革が叫ばれていますが、それ以前に少ない時間で大量の仕事をこなせるに越したことはありません。時間をかけないでサボるのも仕事の内だと先輩から説かれたことは、妥協しないことが正義だと考えていた自分にとって大きな衝撃でした。もちろん「いい加減」では信用に関わるため、いかに「良い加減」を見極められるかが目下の課題です。

もう一つは、コミュニケーション手段です。最近の若者は電話が苦手だと言われますが、私もその一人でした。相手の時間へ強制的に割り込む行為が迷惑ではないかと躊躇してしまうのです。友人に電話を掛けるときは、決まって事前に時間を指定していました。しかし、社会人として日々早いスピードで仕事が進むようになると、電話の便利さを痛感しました。まず、返答までのタイムラグがありません。１分１秒を争うとき、例えば情報解禁や入稿の時間が迫っているとき、すぐに物事を確認できます。また、ちょっとした相談事にも適しています。テキストだけでは難しい微妙なニュアンスを伝えられるため、だらだらとしたメールのやり取りに手間と時間を取られることもあ

（左上）卒業式、（上）サークル活動、そして筆者近景

りません。確かに相手の時間へ強制的に割り込むことに変わりはありませんが、仕事がスムーズに進めば自分も相手も嬉しいはず。そう気づき、電話を使うようになりました。まだ無意識にメールを使ってしまうことも多いですが、上手く使い分けのできる社会人になりたいものです。

最後に、結果に対する責任の重みです。クライアントは結果という対価を求めてお金を支払い発注しています。試合で優勝したい、ではなく優勝しなければならない。入試に合格したい、ではなく合格しなければならない。仕事がやりたい、だけでなく、仕事をしなければならない、という義務も発生します。今までもプレッシャーはありましたが、正社員となってから取引先からいただく対価を目の当たりにしたことで、その責任を重く感じるようになりました。研修でも「仕事は結果がすべてである。過程は評価されないという覚悟を持て」と講義を受け、自分の考えの甘さに恥じ入りました。学生と社会人の違いとは、まさにこの責任の重さにあると思いました。ではどうすれば結果を出せるのかは、今後の仕事を通して考え体得していきたいです。

●友人たちとの会話に刺激を受けながら

就職してから、ドラマ「半沢直樹」の原作作家として有名な池井戸潤さんの小説を好んで読むようになりました。その中に、「銀行の常識は、世間の非常識」という言葉がしばしば登場します。銀行員は出世や人事を基準として物事を判断しがちだが、それは一般大衆には理解しがたい行動である、という戒め。これは銀行に限らず、どうやら他の業界にも当てはまるようです。仕事内容はもちろん、メールやチャットなどを用いる連絡手段、研修期間や人事制度、果ては休日の過ごし方に至るまで、まだ入社数ヶ月にも関わらず数多くの違いがあります。それに気づかせてくれるのは、やはり大学時代のつながりです。今でも週一は先輩後輩同期問わず会いに行き、お互いの話に刺激を受けています。私の周りには５年生となった友人も多いため、学生からの視点も入り初心に返るようで新鮮です。もちろん、単純に学生時代のノリが楽しくもありますが……（笑）。

半沢直樹の世界では、銀行の常識を振りかざした結果、顧客軽視の行動に繋がりました。自分が知らず知らずの内にそういった行動を取らないよう、これからもたくさんの友人たちと会っていければ嬉しいです。

●幅広い経験を積み能力を磨くことに精進を

私事で恐縮ですが、母が起業しました。「新卒の頃は夢や目標なんてなかったけれど、今はやりたいことがたくさんある」と言って仕事に趣味にと日々パワフルに活動しています。

平均寿命が 80 歳を越える今、50 代はまだまだ折り返し地点。母のように年を重ねるごとに新しく挑戦したいことが増えるよう、幅広い経験を積み能力を磨くことが現在の目標です。

まずは素敵な上司や先輩方に恵まれた今の会社で、早く一人前の社会人として世の中のお役に立てるよう精進してまいります。

●柴田香名さんプロフィール

・出身地：神奈川県横浜市
・卒年：2017 年
・ゼミナール：言語とメディアの研究（笹原宏之先生）
・サークル：早稲田祭運営スタッフ

学部創設50周年記念事業レビュー

社学稲門会　副会長
夏越　英成

社会科学部創設50周年記念事業『社学、いま・むかし、そして未来へ』を振り返り、今後の活動の方向性について思うこと

●恩師・大畑弥七先生の強い意志

「社学を日本一の学部にする。政経に伍する学部にする。」

早稲田大学創立100周年を迎える1982年2月、社会科学部大畑弥七ゼミナールの15期生の私は、当時学部長であった恩師・大畑先生の言葉を忘れられません。先生の強い意志を強烈に感じました。

そのための社会科学大学院の開設、大学院を併設する新14号館の建設の構想が当時創設順位8番目の学部として、本部構内で実現に向けた道のりが極めて厳しいことは学部長である大畑先生ご自身が認識された以上のものであったと拝察します。

後年、ゼミのOB会に大畑先生をお迎えする車内で、常に「辞表」を胸に秘めて大学当局との交渉にあった事を伺い、目頭が熱くなった事を想い出しました。小職が大畑ゼミOB、社学稲門会事業委員長として表題の50周年式典を実施する末席に名を連ねたのも大畑先生への「恩返し」であると思っています。

●社学OBスポーツレジェンドによるイベント

社学創設50周年記念事業は、2014年9月から稲門会側の実行委員会組織を確立、実行委員長に佐藤和美氏（77年卒）が就任されました。10月には学部実行委員長の輪湖博先生をはじめとする委員の方々と第1回学部・稲門会連絡協議会が開催されました。12月以降は斉藤鉄生事務長との実務レベルの意見交換会を行い、準備を進めて参りました。

5月14日の第4回社学稲門会総会に合わせて、小野講堂にて社学OBの野球（望月博氏）・サッカー（松永章氏）・ラグビー部（後藤禎和氏）の「レジェンド」をお招きし、津田大介氏の司会にてパネルディスカッションを実施、盛況にて完了しました。

●10月22日、井深記念ホールでの記念事業

ホームカミングデー（10月23日）の前日に学部の配慮により拝借できた井深記念ホールでの記念事業は下記の通り。社学稲門会としてOB／OG・現役・教職員の三位一体を目指して実施しました。

第1部　特別キャンパスツアー「早稲田の、社学の、いまとむかしを歩く！」

第2部　50周年記念特別講義「社会科学方法論」～

田村正勝名誉教授による50周年記念特別講義

50周年記念シンポジウム

応援部指揮によるフィナーレ

会場となった井深記念ホールでの集合写真

田村正勝名誉教授～

第３部　50 周年記念シンポジウム〈わたしと社学、次世代への提言〉

ゲスト：筒井真理子氏（女優）・上野金太郎氏（メルセデンスベンツジャパン代表）・永田晃也氏（九州大学教授）・阿川功氏（社学稲門会会長）

司会：津田大介氏（ジャーナリスト）

第４部　フィナーレ

応援部リーダー（OB 含む）・応援部吹奏楽団・チアリーダーズの協力を得てゲストと参加全員が一体となり応援歌・校歌の大合唱で締めくくる

●10月23日、学部創設50周年記念事業

10 月 23 日は学部主催の社会科学部創設 50 周年記念式典に OB として参加しました。式典において、社学稲門会の活動の柱である給付型奨学金の授与を阿川会長より学部へ、学部から 4 名の奨学生へ授与を実施しました。

50 年前の学部創設時に、今や他の学部が羨む「学部卒業生の寄付による現役学生への奨学金授与」という「校友会のお手本」になる事業を社学稲門会が実施できるようになるまで発展するなど、誰が想像できたでしょうか。

さらに社学の受験偏差値は早稲田大学内で現在トップを争うまでに高まり、社学の評価は内外ともにうなぎ登りです。

式典終了後の井深記念ホール内特設懇親会会場は、教職員・教員 OB、学部卒業生・学部現役学生で満員電車かと思うほどの大盛況。乾杯後、年代を超えた相互懇親、応援部指導による応援・校歌でのフィナーレまで「社学」のパッションを実感した夢のような時間を概ね 250 人の参加者が共有しました。

●社学のさらなる飛躍を願って着実な歩みを

50 周年式典では 51 年目から 100 周年に向けた宣言もなされ、社学はさらなる飛躍の過程を着々と歩み始めました。50 年間の夜間、昼夜間過程を経ての劇的な変革から早稲田内でも、社会でも評価を得られる基盤が形成され、今後は一部上場企業の代表も次々と輩出、経済界でも政治界でも着実な成果は確実な勢いです。

他方、現役社学生のボランティア参加率の高さも群を抜いていると聞いています。さらに近年の社学の英語プログラムは国際性の加速をもたらすでしょう。

社学稲門会は前述の奨学金基金のさらなる充実、約 3 万人の OB ／ OG の母校へのプラットホームとしての合同クラス会等の対応、ホームカミングデーでの大隈講堂をバックとした写真撮影模擬店による奨学金基金への寄付増強を三本柱として活動を継続してまいります。

社学 OB ／ OG ならば、気軽に参加でき、「楽しくなければ社学稲門会ではない」をモットーに、活動の広報にも努めてゆきますので、社学稲門会の HP ならびに FB へのアクセスをお願いして、副会長として会長を支援する小職の寄稿とさせていただきます。

●夏越英成さんプロフィール

神奈川県出身、高田馬場の一橋学院予備校を経て 1980 年社学入学、入学翌日に応援部入部、四年次には副将兼連盟常任委員を務める。
大畑弥七ゼミ（国際貿易論）15 期生。
卒業後、海外勤務を志向して㈱熊谷組に入社、バブル崩壊で国内勤務のみ。
現在、子会社のケーアンドイー㈱営業部勤務。

第５回社学稲門会総会レポート

新たな役員体制で更なる躍動を目指して！

社学稲門会
副事務局長
南雲靖夫

●新役員体制で新たなスタートを

好天に恵まれた６月３日（土）、第５回社会科学部稲門会総会が早稲田大学 14 号館 801 にて開催されました。前年の社会科学部創設 50 周年の式典というビッグイベントの後ということもあり、開催前はどの程度出席者が集まるか少々心配しましたが、来賓を含めて 70 名近い参加がありました。

総会では司会の後藤秀一さん（91 年卒）による開会の辞より始まり、阿川会長のご挨拶、そして来賓の畑早稲田大学理事、校友会の大島組織委員長、福田広報・学報委員長の挨拶と続きました。これらの来賓の皆さんは、普段より社学稲門会の活動への多大なご支援を頂いており、関係者としても大変喜ばしく思いました。

その後 2016 年度の会計収支報告、同会計監査報告、2017 年度予算案についての説明があり、会計・予算も無事に承認されました。

続いて、阿川会長から新役員候補者の紹介があり、こちらも無事全員承認されました。そして新たに役員となった各員会の委員長より、今後の活動計画について報告がありました。今回、各委員長については、ほぼ一新されたため、新委員長に選ばれた方々も、皆一様に期待と不安が入り混じった気持ちだったのではないでしょうか？　改めて、会員の皆様のご協力を切にお願い致します。総会の式次第も予定通り無事終了し、いよいよお待ちかねの講演会に移りました。

●心に沁みる歴史作家・伊東潤氏の講演会

今回の講演者は、歴史作家の伊東潤氏（83 年卒）。講演のタイトルは「強みを築いて競争に勝とう」。伊東潤さんは 1960 年、横浜のご出身。神奈川県私立浅野高等学校から早稲田大学社会科学部に進学。卒業後は、IT ソリューション系のメーカーの営業、外資系企業の日本法人責任者を経て、コンサルタントとして独立。2007 年に『武田家滅亡』で作家デビューすると 2010 年には専業作家となりました。

南雲靖夫さん

伊東潤さんは、「作家という競争の激しい職業についてから、常に自分自身の強みとは何かとずっと考えている」とのこと。また「作家は生産性と多様性と安定性があれば生き残れる」とも言っています。そして「強みを築くには、才能が必要不可欠」といったお話もありました。なんだか作家さんのお話というよりも、コンサルタントさんのお話を聞いているようで、社会の第一線で活躍する社学稲門会のメンバーにもすんなりと伊東さんのお話が入っていくようでした。

伊東さんの小説に登場する歴史上の人物も史実をもとに、伊東さんなりの強みを分析した上で、ご自身の作品にも取り込み、それが様々なヒット作を生んでいるということがわかりました。

私も何冊か伊東さんの小説を読みました。作品の多くは歴史小説ですが、そんな中にあって『横浜 1963』という現代をテーマにした作品に出会い、大変興味深く読んだことを講演後の質疑応答で伊東さんにぶつけてみました。

ご自身、自分の出身地である横浜をテーマにした作品を描きたかったこと、そしてその当時の横浜の匂いを感じ取って欲しかったといったエピソードをご紹介いただき、私自身もこの作品への奥深さに改めて感じ入った次第です（後の懇親会では、伊東さんから本にサイン

伊東潤さん

●南雲靖夫さんプロフィール
出身地：東京都／卒年：1990 年 / 出身校：神奈川県立鶴見高等学校（1985 年卒・一浪）／ゼミ：芹沢功ゼミ（政治意識の研究）

阿川会長の挨拶

も頂きました）。

●盛りだくさんの懇親会、ハプニングもあって…

講演会の後は、恒例の大隈講堂前での記念撮影。いつもの通り、道行く方々から熱い視線を投げかけられました（当日の写真は社学稲門会の HP をご覧ください）。

記念撮影後は、いよいよ懇親会。今回の会場は、大隈会館内の楠亭。懇親会から来られた方もあり、約 60 名の参加がありました。

懇親会では、社会科学学術院長の山田満先生、阿川会長、佐々木校友課長のご挨拶に続き、細井副会長の乾杯の発声で宴がスタート。直ぐに会場のそこかしこに懇親の輪ができました。宴も盛り上がった頃、来賓の方々よりご挨拶を頂戴致しました。

特に照屋佳男名誉教授の「中心のない組織は衰退する。その点、社学の OB は皆、同じ方向を向いて学部の発展に多大な貢献をしてくれました」旨のお話は、本当に心に沁みました。また田村正勝名誉教授より、参加者に著書『2017 年下期の景気の見通し』のプレゼントがありました。

また先ほど素晴らしい講演をされた伊東潤さんと、懇親会から参加された前早稲田大学ラグビー部監督の後藤禎和さん（1990 年卒）による腕相撲が始まりました。突然の出来事に、一同大変驚きましたが、結果は伊東さんの「圧勝」でした。

宴も進み、恒例の応援部によるアトラクションへ。紺碧の空、早稲田の栄光、そして早稲田必勝チャンスパターンメドレーに続き、締めはやはり早稲田大学校歌。校歌、紺碧、栄光を歌うことは、「早稲田を出て

恒例の早稲田応援部によるアトラクション

本当に良かった」という思いを改めて感じさせてくれる至福の時間だと思います。

最後は、伏見副会長の中締めの挨拶で楽しかった総会もお開きとなりました。その後も有志によって、二次会、三次会（!?）へと繰り出す方も多く、長くも本当に充実した一日となりました。

●楽しくなければ社学稲門会ではない！

今回で 5 回目を迎えた社学稲門会の総会でしたが、毎回充実した内容で、社学卒業生の結束の強さを感じることができました。また懇親会等では、川尻奨学金委員長を中心に在校生への奨学基金や、早稲田祭実行委員の学生による「早稲田祭 2017」への募金活動も行われました。ご協力を頂いた皆さま本当にありがとうございました。

最後になりましたが、社学稲門会では、毎月第 2 水曜日に定例会を開催しております。新たな役員も決まり、今後も「楽しくなければ社学稲門会ではない！」をモットーに様々な楽しい企画を考えてまいります。引き続き、皆さまからの社学稲門会へのご支援をよろしくお願い致します。

奨学金委員会の具体的な活動

三位一体の稲門会（学生・教職員・卒業生で構成）の具現化の一翼を担う奨学金委員会

先ず初めに、皆様方の社学奨学金基金へのご協力に感謝申し上げます。
今回は、社学奨学金・社学稲門会・奨学金委員会について、簡単に述べたいと思います。

①社学奨学金は、社学稲門会の核と言えます。
既に、50 名近くの社学生が社学奨学金を得て、有意義な学生生活を送る一助としています。

②社学稲門会の一丁目一番地は、上記①の奨学金活動ですが、それ以外に特筆されるのが三位一体の稲門会（学生・教職員・卒業生で構成）である事です。
卒業生だけの稲門会ではなく、学生・教職員まで含んだ、正に学部稲門会と言えます。
このような稲門会は、早稲田で唯一です。

③奨学金委員会は、上記①と②の具現化の一翼を微力ながら担っています。

上記①の具体的な活動は、言うまでもなく寄付金集めとなります。
上記②の具体的な活動は、社学生に「社学奨学金大使」になって貰い、総会やホームカムイング等のイベント時に、懇親会場で寄付金集めに尽力して貰っています。
これぞ、学生と卒業生のコラボであり、三位一体の一つの姿ではと思っています。
余談ですが、上記イベントに参加された方々ならば、「社学奨学金大使」が持つ、募金箱へ笑顔で寄付された事を思い出すのでは？
「笑顔の募金、素晴らしいなぁ」と、いつも私は思っています。

未来永劫、社学稲門会は「社学生の為の奨学金」をミッションに掲げ、三位一体の稲門会として活動していくと思います。
その原動力になるのが、若き日に社学に学んだという連帯感＝社学愛です。
この社学愛で、卒業生が一丸となり社学稲門会を盛り上げていけたら最高です。

2017 年 9 月吉日

社学稲門会　奨学金委員会
委員長　川尻　光昭

再び早稲田の杜に集まろう！

第24回社会科学部合同クラス会のご案内

早稲田大学校友会最大の催し「稲門祭」に合わせて、旧友や恩師が集う社会科学部合同クラス会を下記にて開催します。ホームカミングデーに該当されている、卒後45年（昭和48年卒）、卒後35年（昭和58年卒）、卒後25年（平成5年卒）、卒後15年（平成15年卒）をはじめ、すべての年次の皆さまをご歓迎申し上げます。

SNSの普及により、音信の取れなくなった友人を探すことは格段にやさしくなりました。ホームカミングデーはまたと無いチャンスです。ご学友を探してみて下さい。そして合同クラス会への参加を呼び掛けてみて下さい。遠方の友人と久々に旧交を温めて下さい。合同クラス会ではご家族の参加も大歓迎しております。

また当日は、社学OBで歴史作家の伊藤潤氏による講演会も予定しております。

皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げております。

●日時・会場／ 10月15日（日）

第一部：15：00～早稲田大学14号館8階801会議室（受付14：30～）

第二部：18：00～リーガロイヤルホテル東京（会費7,000円）

＊懇親会費は当日第一部または第二部会場にてお支払い頂きます。
なお、社学稲門会2017年度年会費（3,000円）のお支払いがお済みでない方は当日、お支払い下さいますようお願い申し上げます。

●次第

第一部　2017年奨学金授与式・講演会

1．開会
2．社会科学部稲門会　会長挨拶
3．来賓・教員紹介
4．来賓挨拶
5．社会科学部卒業生奨学金の趣旨説明
6．奨学金授与
7．奨学生挨拶
8．記念講演会
　歴史作家・伊藤潤氏（83年卒）
9．閉会〈16：30終了予定〉

第二部　懇親会

1．合同クラス会主催者挨拶
2．乾杯・歓談
3．ゲストスピーチ
4．記念撮影（該当年次、参加者全員）
5．校歌／応援歌斉唱
6．閉会

「第一部会場」「第二部会場」「記念写真ブース」案内図

※社会科学部稲門会は「合同クラス会」の他に、「記念写真撮影ブース」を稲門祭に出店しています。
大隈講堂をバックに思い出の写真を1枚いかがですか。10：00～16：00まで早稲田で最も記念撮影に適した正門近くにブースを構え、皆さまのご来店をお待ちしております。

社会科学部合同クラス会への参加申し込み、お問い合わせは下記までお願いします。

お申込み／　http://syagakutomonkai.com

お問い合せ／E-mail：event@syagakutomonkai.com

社会科学部稲門会役員一同

ゼミリレー⑲
大畑 弥七 ゼミ

隠塚（おんづか）　功（いさお）
（1988 年卒）

人生の指針となった大畑ゼミでの２年間

●早大生の実感を得て青春を謳歌

1984 年に入学した私は、その１年間、どこの大学とも違う早稲田大学の大学生になったことを実感し、謳歌することができました。

入学してすぐに WBC という軟式野球サークルに入部し、練習を週２回行い、合宿では朝から晩まで野球漬けといった、まるで高校球児を思わせるサークル活動と住友三角ビルでの喫茶店でのアルバイト、これらが大学生活の中心でした。

先輩の声掛けにより翌朝まで飲んでいる日もあれば、早慶戦や早明戦の応援に行くのはもちろん、泊りがけでチケット購入するなど、早稲田大学への母校愛と絶対的な先輩と後輩の関係が無ければ経験できないことを幾つも経験した１年間でした。

またこの年は、後期試験が、なんと「大学授業料値上げ反対」の学生デモによって中止となり、全学部で後期試験がレポート提出に切り替えられたのです。学生運動というのは過去のものと思っていた私には驚きで、他の大学では起きていなかったことからも、これも早稲田大学ならではの経験であったと思っています。

●大畑弥七先生の「貿易論」履修から大畑ゼミへ

このような何もかもが新鮮な１年間を終え、２年生では勉強したかった「貿易論」の授業を履修しました。この授業が後にゼミでもお世話になる大畑弥七先生の授業だったのです。

当時、大畑先生は社会科学部の学部長も務めておられ「新しい学問の方向である『学際的』研究・教育をこの学部で充実させなければならない（第 18 号社会科学部報より）」と忙しく東奔西走されていました。より勉学意欲の高い学生の集まる学部にしたいとの考えに立ち、学生にも厳しく指導されていた時期のことでした。

そのため大畑先生の授業は決して学生に寄り添う授業ではありませんでしたが、刺激を受ける授業であり、私にとっては楽しみな授業となりました。そんな私には、３年生からのゼミについて、学部内で一番厳しいと噂されてはいましたが、大畑弥七ゼミを希望するのが当然の流れでありました。

しかし、大畑弥七ゼミは競争倍率も最も高いゼミだったことから、まずは大畑先生に私を知ってもらおうと思い、この授業では先生の質問に答えるなど、他の授業とは違い本当に積極的に取り組んでいました。

その甲斐あってか、大畑弥七ゼミに応募した後に、ゼミの先輩方による面接を経て、何とか大畑弥七ゼミに合格することができたのです。私にとってはこの瞬間が、大袈裟ではなくこれで社会科学部に来た意味があると思えた瞬間でした。

●「サムエルソン合宿」と大畑ゼミの真髄

これで大畑弥七ゼミの一員になることは決まりましたが、大畑弥七ゼミは３年生のゼミ生となる前に、経済学の基礎をしっかり身につけておくことが求められており、３年生になる直前の春休みに、２泊３日のサムエルソン合宿に参加しなくてはならないのです。

サムエルソンとは経済学者であり、この合宿のテキストが「サムエルソン経済学（上・下）都留重人（訳）」であったことからこのように呼ばれていました。学ぶ

「サムエルソン経済学」上下巻

サムエルソン合宿（臼井康仁氏提供）

卒業アルバムより

とは言っても、これが大変で、新ゼミ生への講師は同じ新ゼミ生が務めるのです。そのために、新ゼミ生は担当章を３年生の指導の下で勉強をし、誰もが理解できるように発表しなくてはならないのです。

なお、この合宿では担当者の説明がわからない場合には、担当者に「わからない」と言うことが前提となっており、全員が「わかった」と言うまで説明は延々と続くため、中には説明が４時間を超える人も出てくるのです。結果として、発表時間は伸び、その分睡眠時間が削られて、ほぼ徹夜に近いような２泊３日のゼミ合宿になるのです。この最初の難関で、大畑弥七ゼミ生は、自分がわかった気でいても、他人にわかってもらうことが如何に難しいかを実体験することになるのです。

これを乗り切って初めて、正式な大畑弥七ゼミ生となるのです。厳しくも辛いスタートではあるのですが、この経験は大変貴重なだけでなく、その後の人生に大きく寄与することになったことは間違いありません。このことが今となってはよくわかるのです。

この合宿を終えて、経済学の最低限の基礎を身につけたとして、３年生からのゼミが始まります。しかし、このゼミも私たちの時には大学院生であった重見さんによる指導が中心で、大畑先生がゼミに出席して指導していただく機会は大変少ないものでした。

つまり、大畑弥七ゼミとは先生の直接の指導というよりは、代々引き継がれた指導方法に基づいて、先輩が後輩を指導することが主流で、これによって学生が一層力をつけていくといったものだったと思います。

それでも大畑先生というのは存在感がもちろん強く、「cool head and warm heart」や「鳥の目、虫の目」といった言葉で学生の思考や意識について指導され、年次を越えて共通の言語でゼミを振り返ることのできる貴重な先生だったと思います。

●ゼミの副幹事長として先生のお手伝いを

ところで、私はゼミの副幹事長を務めていました。幹事は大畑先生が大学に来られる際に、商学部のゼミ幹事（大畑先生は商学部にも授業とゼミを持っておられました）と一緒に、研究室に待機して、先生のお手伝いをするのです。しかし代々、社会科学部のゼミ幹事はあまり研究室に近寄らない傾向があり、先生は私に「俺は社会科学部の学部長をしているのに、俺の傍には商学部の学生の方が多い」とぼやくのでした。大畑先生はそれだけ社会科学部、そして学部生に対して、期待を抱く一方で寂しさを感じておられたのではないかと思います。

その大畑弥七先生は 2012 年９月 23 日に永眠されました。少なくとも私の回りで社会科学部に対する思いがこれ程強い人はいなかったと思います。そんな先生の傍で２年間お手伝いをさせて戴き、学ばせていただけたことを誇りに思っています。

私は 2003 年から京都市会議員を務めており、先生から学んだ「貿易論」や「国際金融論」とは縁のない仕事になっていますが、私の考え方の根底には大畑弥七ゼミで鍛えられたものがあります。たかが２年間のゼミではありますが、人生に大きく影響する２年間だったと思っています。

●隠塚功さんプロフィール

1963 年兵庫県生まれ。
1988 年早稲田大学社会科学部卒業。
京都信用金庫、長谷工コーポレーションなどを経て、
2003 年京都市会議員初当選。
現在４期目。この間、副議長、常任委員会委員長、京都市監査委員などを歴任。

寄稿 早慶戦観戦記

早慶戦に想う事

学生時代と 2017年東京六大学野球春季リーグ戦早慶戦応援記

西宮 正明（1982年卒）

相変わらず、春の早慶戦は、試合同様熱い（暑い）天候となり、学生時代には考えられない日焼け止めや、汗を拭くためのタオル、エンジ色のTシャツ、冷えたペットボトルなどの準備が必要になります。

今回も応援部OBであるN氏と現役応援部のご好意により、応援席チケットと応援グッズはもとより、神宮球場1塁側の特等席を我々社学稲門会メンバーにご用意いただける最高の環境の中、慶應が連勝すれば慶應の優勝、早稲田が1勝でもすれば、立教の18年振りの優勝という我が軍にとっては、やや複雑な心境での早慶戦となりました。

●早慶戦の歴史を振り返ると…

ところで、突然ですが、今では当たり前の“野球”という日本語はどのように生まれたのでしょうか？

モノの本によりますと、一高時代は名2塁手でならし、大学に進むやコーチ・監督として後輩を指導。明治草創時代の学生野球の育ての親といわれた中馬（ちゅうまかのえ）庚氏が1894年（明治27年）ベースボールを「野球」と最初に訳されたようです。彼はまた、1897年（同30年）に野球研究書『野球』を著作。これが日本で最初の野球専門書だそうです。

さて、そんな野球の黎明期。早慶両校の最初の対戦は、東京専門学校から早稲田大学へと改称された翌年の1903年（明治36年）11月21日、慶應の三田綱町球場にて行われたようです。

記念すべき最初の試合は、11-9で慶應の勝利。当時は一高の全盛期も、野球部発足から1年余りの早稲田が、先輩格で20年近い歴史を持ち、かつ、一高にも勝利をするほどの慶應に所謂「挑戦状」（実際は、“新参者なので練習させて下さい。先輩！　OKならそちらに伺います！”の練習試合申込書）を送り、慶應が応じた事によって行われたのが始まりのようです。

左から二人目が筆者

なお、この試合は三田綱町グランドで行われましたが、このグランドは何と今でも現存。私の勤務するオフィスから徒歩10分ほどの場所で、実際に現地にも赴いた事があります。110年以上も前に此の地で起きた事を想像するのは感慨深いものもありますが、周りの風景も含め、大変難しい事でした。

翌年からは定期戦を行うことに決まったとの事ですが、その後も当時の学生野球王者と謳われた一高野球部に早慶両校が連日にわたり勝利すると、早慶戦は頂点を争う試合として注目されたようです。

ただ、それは同時に応援合戦の過熱も招き、1906年（明治39年）秋、第1戦に勝利した慶應の学生が大隈重信邸前で万歳を行えば、第2戦に勝利した早稲田の学生も福澤諭吉邸前で、万歳三唱を行うなど、両校応援団は一触即発となるような事態となった結果、第3戦は中止。その後1925年（大正14年）の

早慶戦百周年記念碑

復活まで19年もの長きに渡って中止期間が続いたようです。

復活後は、その試合の模様が、当時普及し始めたラジオの電波に乗って全国に広まり、球場に入れない(当時の神宮球場は6万人を収容する規模があったと聞きます。現在は3万6千人）ファン向けに試合解説特設ステージが設けられるほどだったそうです。

その後もエンタツ・アチャコの漫才の題材や、「リンゴ事件」(この事件後、早稲田が1塁側、慶應が3塁側に固定されることになったのは余りにも有名なエピソードです)、戦時中には、「出陣学徒壮行早慶戦」。

戦後には1960年（昭和35年）秋のリーグ戦での安藤元博の連投で、早稲田の優勝が決定した早慶六連戦など、事実は小説よりも奇なりを証明する事実を作り上げてきた世界的にも稀な大学間定期戦です。

やや硬くなりましたが、早慶戦ってこんなにも伝統のある、そして現在の日本の野球人気を作り上げて来た無形重要文化財的なイベントなんですね。野球に限らず、ほとんどの競技で早慶戦が行われているようです。

●学生時代は軟式庭球同好会で早慶戦を

私はこの早慶6連戦の前年の大晦日に、栃木県宇都宮市で生まれました。生まれるや否や、父親の仕事の関係から、京都（山科)、甲子園、八王子、浦和と転々として、3つの小学校を経験。浦和市立常盤中学3年の卒業間際には、愛知県の岡崎へ。何と高校3年になると大阪への転勤が決まり、私の下宿生活が始まります。

国公立大学へ入って少しでも親孝行を！　の思いは、高校2年にして化学の授業から断念せざるを得なくなり、それから化学は読書の時間に。その読書時間に読んだのが『人生劇場』であり、『青春の門』。こんな学校があるのか!!　の衝撃と蛍雪時代で偏差値を見たときの衝撃。そして、NHK教育テレビでの早慶戦中継の衝撃（当時早慶以外の試合も中継していた記憶があって、早稲田に校風が似ていると言われていた明治の筆記体のロゴも印象に残っています。駿河台の明治記念館の校舎も重厚で渋い雰囲気で好きでした)。

学生になるなら法律を勉強してサラリーマンにはならない！　なんていう蒼い理想を持って、1978年に入学。中学生の時には、マジでウインブルドンを目指していた典型的な体育会系の私は、早速体育会の庭球部へ入部すべく、テニスコートへ練習の見学（当時は、大隈会館となりにあるリーガロイヤルホテルの場所)。

その衝撃は凄まじく、全国トップレベルである事は認識していたものの、その考えの甘さに自己嫌悪していた時に、南門を入ってすぐの法学部前にて新入生勧誘をしていたヤングテニス同好会軟式部（本年度創立55周年目。社学より古い！）へ入会。

第1学生会館を溜まり場に、法学部での他学部聴講や、同じクラブの法学部の友人と創法会で民法総則の読み合わせなどもしていたものの、東京都軟式庭球学生同好会連盟（略して“学同連”：早稲田理工、慶應、中央、専修、日大文理、青学、駒沢、和洋女子大の8大学9団体が加盟する約650名からなる組織。インターハイ・国体経験者も多く、レベルは高かった。一方関西にも同じような連盟が存在し、東西のベスト16が集まって合宿をする東西対抗は、その参加自体が名誉でもあり、東西の代表としての自覚と関西弁の同世代との懇親会は思い出。私は3年次に理事長として山中湖での東西対抗を中央、駒沢、専修など学同連のメンバーと運営する役割でした）での試合をはじめクラブ仲間との交流が次第に大学生活での中心となり、その中でも早慶戦は、春･夏の合宿などとともに、大きなイベントでした。

早慶戦の醍醐味、試合終了後のエールの交換で次戦のリベンジを誓う

●学生時代の早慶戦の思い出

週末の神宮球場では他の４大学との試合も応援席で大きな声で応援していた事を思い出します。現役４年間では、明治・法政が強くて、早稲田の優勝は、入学年次の秋と２年生の春。とりわけ最初の優勝は20何年振りに早慶戦が実質の優勝決定戦という事で、超満員だった事を記憶しています。

同期入学には、甲子園へ出場した今治西高出身の三谷投手が１年のときからレギュラーでしたが、守りのチームというよりも打撃のチームで阪神タイガースへ入団した２年上になる岡田彰布を筆頭に、中屋、島貫、金森、有賀など強打者・好打者が揃っていたのが思い出されます。

一方では、あのNHKのキャスター大越投手在学の際には東大に連敗し、勝ち点を取られた事もあり、まさに波乱の期間でした。優勝時には、神宮の絵画館前から提灯行列が始まり、明治通りから早稲田通りを抜け､体育局裏の広場で（現在の学生会館）優勝祝賀会。缶ビールなど振舞い酒も出て多くの学生が応援部リードの下、野球部選手と一緒に紺碧の空、校歌で同じ空間を謳歌します。

新宿歌舞伎町劇場前への移動後は、コマ劇場前の噴水で、一升瓶飲み回しの先輩諸氏から、池へ投げ込まれる洗礼を受けたのも忘れられません。５千人（もっと？）以上の学生がいたのではないでしょうか。騒然とした雰囲気の中、神宮球場では試合開始の前日から徹夜で明かし、歌舞伎町でもほぼ徹夜なので、若くなければ出来ない無謀かつ世間への迷惑行為をしていたものです（しかしながら、こういった無謀さが、終末期とは言え、未だ許容される時代であった事も感じます。いつの頃から神宮球場での徹夜は禁止となりました。まぁ、当然ではありますが)。

●卒業後､23年ぶりの早慶戦に感動して…

そんな早慶戦と六大学野球ですが、卒業後は会社での仕事を本当に一所懸命で、余裕もなかったのでしょうか。また、入社３年後には大阪本社でのマーケティング部への転勤となり（その後のビジネスマンとしての私の基本カテゴリーはマーケティング中心となります。学生時代は田中由多加先生の授業で“良”を頂戴し、辛くも単位取得でしたが、正直面白いとは想いませんでした)、私の大学との距離・神宮球場・早慶戦との距離はどんどん拡がっていきます。’98年には外資系製薬会社への転職などもあり、一層その距離は拡がりました。

そんな中2004年には本社のあるロンドンでの単身赴任生活が始まるのですが、偶然にも英国稲門会の存在を知る事で、稲門会という交友会組織を知るという機会にめぐり会えました。

英国稲門会では早稲田大学交友の世界での活躍に刺激を受けましたが、チャレンジは帰国後にやって来ます。事業に占める売上・利益の多くを占める営業・マーケティング部門を預かる事になった私は、精神的にも大変キツイ時があったのですが、ある友人から「早慶戦行こうか？」とお誘いが……。「早慶戦……」。卒業以来20年以上も、忘れていた言葉です。

23年振りの神宮球場・早慶戦は、校歌・紺碧の空はもとよりコンバットマーチで盛り上がり、聞いた事のない新たな応援歌や応援スタイルも登場していたものの、仕事での悩み事や精神的なプレッシャーを跳ね除ける不思議な元気を注入される時間となりました。

それ以来、春・秋のリーグ戦へ足を運ぶようになり、ベースボールマガジン社が年4回発行する「大学野球」を購入して戦前の予想を展望し、リーグ戦終了後には、試合を振り返るというパターンが10年以上も続いています。

感じるのは、応援席での学生の少なさ。一部には、声を枯らして応援する学生も見かけるものの、OB／OGと思しき方々が多く、主役である野球部の選手諸君と同じ時間を過ごす学生の皆さんが、その時々の感動やドラマ（事実は小説より奇なりと申しますが、野球では本当に信じられない展開が目の前で起こり、その都度呆然としたり、万歳したりと感動を呼び起こします）をリアルに体験出来るこの空間に、是非足を運んだら？　と思うのは私だけではないでしょう。

●今春早慶戦1回戦は逆転負けだったが…

随分と遠回りをしましたが、今春の早慶1回戦は、気温同様の熱い戦いで、織原（四年：早実）、長谷川（4年：仙台育英）、加藤（2年：早実）の社学スタメンの活躍もあるものの、6回裏の慶応清水の満塁本塁打で意気消沈。と思いきや7回表エールの校歌が効いたのか佐藤主将のソロ本塁打に続き、熊田の、適時打などで、一気に5点の劇的な逆転。大いに意気の上がった1塁側だったものの、その裏慶応柳町の何と再びの満塁本塁打。1塁側内外野応援席は呆然。そのまま試合は終了し、若き血による大合唱にやられました。

我々社学稲門会メンバーは、反省会へ突入。生ビールでの乾杯から、何杯注文したか不明なハイボールで、試合を振り返り、懇親を図り、翌日の第2回戦の勝利を確認しました。

学生・卒業生・教職員三位一体の社学稲門会として

校旗の登場で応援の士気も上がり

結果は5-8の逆転負け

は、このような三位一体での早慶戦応援も出来ればとも思った瞬間でした。3万人を超える肩を組んだ観客が早慶賛歌を同時に奏でたり、数々の逸話を作ってきたりと、世界にも類を見ないこの一戦に参加しない手はありません。とりわけ現役学生の皆様へは、お薦めです。東京六大学連盟も色々趣向を凝らしていて今春からは出身校、所属学部などの情報とともに各選手のヘッドショットが登場しています。

第2戦は佐藤主将の2試合連続の本塁打などの活躍で早稲田の勝利。この瞬間、立教の18年ぶりの優勝が決まりました。タイとなった3戦目は、慶應が勝利し、勝ち点奪取。早稲田は4位となりましたが、2年生の4番加藤が首位打者に。今秋での巻き返しが望まれます（立教大学は、その後の全日本大学選手権でも59年ぶりの優勝を勝ち取り、東京六大学の代表として面目躍如たる結果を残しました）。

寄稿 WASEDA CLUB からのメッセージ

ワセダが果たすべき役割

後藤 禎和（1990 年卒）

■ワセダクラブ設立

大学卒業後、ヤマハ発動機時代にオーストラリアでラグビー留学を経験させてもらったことが契機となり、私の中で、従来の日本にはなかったスポーツ環境、すなわちクラブとしてのスポーツ文化を創り出すことが大きな目標の 1 つとなりました。当時（1990 年代半ば）のラグビー界においてプロ化が急速に進んで行く中で、自身が置かれていた企業スポーツのあり方に強く矛盾を感じていたからです。

その後、早稲田大学ラグビー部のフルタイムコーチをしながら、早稲田の大学院で経営学を学び直し、修了と同時に NPO 法人 WASEDA CLUB（以下、ワセダクラブ）を立ち上げ、その運営に専従することになりました。ワセダクラブは、早稲田大学体育各部と協働体制を構築し、各部が培ってきたスポーツ資源を、大学関係者だけでなく、地域に対して広く開放することにより、日本のスポーツ環境を改善していくことを目的としています。

企業スポーツと大学スポーツでは、その目的や置かれている環境自体が大きく異なりますが、今までの日本にはなかったモノを創り出すという意味では、元々自分が挑戦したかったことと合致しており、一大決心をもってこの事業に身を投じることにしました。現在は、主に青少年を対象とした各種スポーツのスクール活動を中心に事業を展開しており、種目数は 16 種目、そこに所属する会員数は 2,000 名に及んでいます。

■大学スポーツの変遷

この 20 年余の間に、大学スポーツを取り巻く環境は、大きく変化してきました。ラグビーを例に挙げるならば、その変化は、やはりプロ化の影響を大きく受けているということができます。

強豪チームにおいては、芝生のグラウンド以外に、

監督時代の筆者

選手全員が効率的に筋力トレーニングを行えるジムが完備され、グラウンド上でラグビーを指導するスタッフの他に、ジムで筋力トレーニングを指導する専門のスタッフが確保されることが当たり前となっています。また、トレーニングだけでなく、選手たちの栄養摂取も徹底して管理されるようになり、食事に関連する費用も年々、増加の一途を辿っています。

一方では、少子化が進行していくのと並行して、経済の格差は地方に行けば行くほど拡がりを見せており、地方から東京へ進学する学生の数は、全般的に減少傾向にあります。このような状況の中で、多くのチームは、スポーツ推薦制度を拡充し、経済的な支援を施すことで全国から優秀な選手を確保することに余念がありません。

つまり、現在の状況下で優勝を目指していくためには、経済的な基盤を基に、よりプロフェッショナル的な手法を用いて強化していくことが必要となっているわけです。プロ的な強化手法の推進は、選手個人や競技そのものの技術レベルを格段に進歩させることは間違いありません。しかし、その反面、各チームが置かれている環境の相違により、チーム間（選手間）の実力差は否応なく拡がっていくことになります。また、プロ的な強化手法の導入による選手たちの拘束時間の

ワセダクラブが中高生向けに開催しているラグビーアカデミーの 2016 年度修了式

増大（シーズンオフがない？）や、生活面の徹底した管理が、彼らの精神面にどのように影響を及ぼしていくかについては、きちんと検証すべきでしょう。

早稲田大学をはじめとする伝統校は、これからの大学スポーツをどのように位置づけていくべきか、それぞれに揺らいでいます。優勝をかち取るために経済的な支援体制を強めていくのか、あくまでスポーツは人間育成の一環として文武両道を追い求めていくのか、あるいは、何かまったく別の新しい道を開拓していくのか、大学スポーツは今、大きな岐路に立たされていると言えます。

■大学スポーツが果たしていくべき役割

大学が大学である以上、そこで営まれるスポーツ活動においても、その目的から人間育成という側面を絶対に外すべきではありません。人間育成を実現させるために、勝つことを最大目標に定めることは、必要不可欠です。しかし、もしも勝つためのプロ的な手法が人間育成を阻害させることに繋がるならば、大学チームは、勇気を持ってその手法から手を引くべきでしょう。強化のすべてをプロ的な手法に頼らずとも、勝つ可能性が“ゼロ”になるわけではありません。強化のための資金獲得や、優秀な選手の確保なども、伝統校にしかできないやり方が、確実にあるからです。

また、こうした価値観（スポーツを通じて人間を育成する）を共有し合える好敵手と覇を競い合う、いわゆる対抗戦思想を今一度復活させていくのも、１つの道ではないでしょうか。プロ・スポーツと比較すれば、競技レベルは確かに劣るかもしれませんが、互いに尊敬し合える相手との年に１度しかできない本気の勝負は、文化としてのスポーツの価値を高めていくはずです。少なくとも、早稲田大学には慶應義塾大学という良きライバルが、100 年の長きにわたって存在しているのです。

一方で、大学が果たすべきもう１つの役割として、世の中に対して新しい価値を発信してくことが挙げられます。大学という枠組みに囚われずに、日本のスポーツ界が抱えている問題を解決するために、新しい試みにチャレンジしていくことは、大学に課せられた使命でもあります。

- **少子化や経済格差に伴う普及環境の停滞**
- **プロ化やグローバル化に対応できるだけの新しい強化システムの構築**

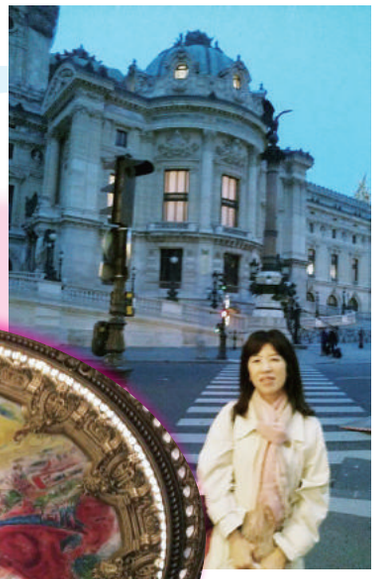
ワセダクラブの活動を通じて、この２つの課題を克服することが、私の目標であり、夢であります。

体育各部がそれぞれに培ってきた伝統、ノウハウを駆使しながら、自らの手で次世代の選手たちを育て上げ、彼らが世界に通用するレベルに達するまでの新しい環境システムを創り出す。それを最初に成し遂げることができるのは早稲田大学しかないと、私は信じています。

●後藤禎和さんプロフィール

・1967 年　東京都生まれ
・1986 年　東京都立日比谷高校卒
・1990 年　早稲田大学社会科学部卒。
　在学中は、ラグビー蹴球部に所属
・1990 年　ヤマハ発動機㈱入社
・2003 年　早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
　MBA 課程修了
・2003 年　ヤマハ発動機㈱退社
・2003 年　NPO 法人 WASEDA CLUB 設立と同時に
　事務局長就任
・2012 ～ 2015 年　早稲田大学ラグビー部監督を務める

パリ・オペラ座の前の筆者



「社ガールの会」活動報告

早稲田と社ガールと私

井上 明美（1984 年卒）

パリ・オペラ座
「シャガールの天井画」

●パリでシャガールの天井画を観賞

おととしの春、かねてからの夢だったフランスのパリを訪れた。滞在中にしたいことは山ほどあったが、その大きな課題の一つに「オペラ座（ガルニエ）のシャガールの天井画を鑑賞する」ということがあった。なぜなら私は“社ガール”だから。伝統あるオペラ座のシャガールの天井画から、当時子育ても一段落し第二の思春期か（？）の私が、これから“社ガール”として進むべき道や果たすべき使命のヒントを得られるような気がしたからだ。

そのシャガールの天井画の題名は「夢の花束」――1964 年の製作だそうだ。円形の大きな絵は赤･青･白･緑・黄色と５つの色に分けられ色ごとに数名の音楽家とそのオペラ・バレー作品、そしてパリの風景が描かれている。「わ～、ずいぶんと自由で盛りだくさんのメッセージが込められているなあ」というのが直観的に感じたことだ。シャガール自らこの絵に関し『この場所にちょうど鏡を置いたように、下の舞台で俳優や音楽家が作り出す盛りだくさんの夢を映し出したいと思った』と語っている。

●早稲田生活を満喫した青春の日々

このシャガールの「夢の花束」が製作された 1964 年は、私にとって衝撃的な年である。私３歳、初めて大隈講堂を見上げた年だ。その瞬間子供心に感じた一種独特の恐怖とまるでこの世の建物ではないような幻想的で不思議な威力に吸い込まれてゆく感覚（いわゆる､これを「運命的なものを感じた」というのだろう）をいまだに鮮やかに覚えている。

が、私と早稲田の出会いはそれ以前、私がまだ母の胎内にいたころ――昭和 35 年秋の東京六大学野球早慶６連戦――だったようだ。

早稲田 OB で母校愛あふれる父と、父の影響ですっかり早稲田ファンとなった母は、連れ立ってよく早稲田スポーツ観戦や校友会行事に出かけていた。伯父や従兄も早大出身ということもあり、物心つく頃には早稲田の校歌や応援歌を口ずさみ、自分の進むべき道は当然早稲田のみと心に決めていたのは、そんな胎教をも含む周囲の――特に父の影響が強い。

学生時代の私は、アルバイトをしては旅行をし、旅行をしてはアルバイトをしていた。中でも所属サークルであった中国語学習会の仲間とともに憧れの中国大陸を踏みしめたことは印象深い。このサークルの仲間とは、中国語だけでなく様々な活動を共にした。お酒を酌み交わしつつ青春の悩みを語り合ったこと、食料を買い込み友人の下宿で朝まで騒いだこと、３年生の創立 100 周年にはラグビーとともに野球も優勝し、神宮から母校までのパレードに参加、肩を抱き合って勝利の喜びに酔いしれたことなど思い出は尽きない。

また、語学クラスのたくましい女友達――現社ガールの会代表･山野千鶴子さん、女優で噺家“るーしー”としても大活躍の林由紀さん――そして担任の照屋佳男先生との出会いは私の財産だ。現在も“生き生きとした交流”（この表現は照屋先生が良く使われる非常に感銘を受けた言葉）を継続させていただき有り難いことと感謝している。

さらに恩師・田村正勝先生のゼミでともに学び語り合い後に結婚した夫との出会いなど、早稲田では人生を左右する多くの邂逅があった。

●夢の「親子三代早稲田」に見せた父の喜び

2006 年、娘の萌希が早大商学部に入学し晴れて親

娘・萌希の入学式

息子・光の卒業式

子三代早稲田となれた時、父の喜びはひとしおだった。その安堵からか、その年の12月、父は早稲田の校歌・校旗に見送られ84歳の生涯を閉じた。父危篤の際、当時中学1年生だった息子の光は、父の枕元で「おじいちゃん！　僕、絶対早稲田に入るからね！　安心してね！」と叫んだ。その約束通り2012年、光は早大政治経済学部に入学した。

昨年娘はプロギタリストの松尾俊介さんと結婚し、息子は小説家を目指している。二人の子共たちは悩みながらも早稲田人という誇りを胸にそれぞれ自分の道を歩んでいくだろう。二人とも、苦しいとき悲しいとき、早稲田の校歌を口ずさむのだそうだ。私はそんなわが子でもあり後輩でもある子供たちに接し、この子供たちや広く後輩たちが将来に希望を持てるよう、夢を実現していくプロセスを見せられる母親や先輩でありたいと強く思う。

●夢はかなう、かなえるものだ！

伝統あるパリ・オペラ座のシャガールの「夢の花束」を見上げた瞬間、私は初めて大隈講堂を見上げた時の戦慄と同じような感覚が全身を走った。そしてパリ訪問が実現できたことの達成感と歓喜で心が震えた。そして思った。夢はかなう、かなえるものだ！

パリから帰国後すぐ、幼いころからの夢だった「ピアノの先生になる」をどうしても叶えたくなった。パリのシャガールの天井画を実際観に行けたという自信と、その絵が発信している“音楽”の自由さ、そしてパワーのようなものが私の背中を押してくれたのだと思う。カワイ音楽教室で学びピアノ演奏のライセンスを持っていたこともあり、間もなく私はピアノ講師となれた。

演奏中の筆者

音楽という好きなことを通じて、私が社会に貢献できる道が開け、嬉しく有り難い。社ガール仲間で介護施設で働いていらっしゃる高橋恵子さんのご厚意で施設でのボランティアコンサートも実現できた。施設利用者さんは一緒に歌われ、アンコールやリクエストをくださった。スタッフの方から「皆さん喜んでいましたよ」と聞き、とても嬉しかった。このコンサートを通じて、音楽を楽しむということの基本を教えていただけたと思う。恵子さんや皆さんに心から感謝している。このようなコンサートも私がずっと実現したかったことだとその時、気づいた。

シャガールの天井画を観た時インスピレーションを得、私の中での“社ガール魂”なるものが爆発し、何かが始まった気がする。

私は今、伝統ある早稲田大学の社学稲門会“社ガール”の一員として修業を積み、あの絵に込められたような人々の盛りだくさんの夢をくみ取れる人になりたい。そして、「私なりに一人一人のための“夢の花束”を製作し、音楽を通じてそれを笑顔で手渡してゆけるようチャレンジし続けたい」と思う。

●井上明美さんプロフィール

東京都足立区出身。乙女座、A型。1984年卒。
語学クラス：照屋佳男先生担任の英語でⅠ組。
ゼミ：田村正勝先生の社会科学古典研究。
サークル：中国語学習会、雑学舎、旅行研究会。
好きな言葉：現世を忘れぬ久遠の理想。
趣味：早稲田スポーツ観戦、読書。
好きな食べ物：お酒とアイスクリーム。
特技：ピアノ。

寄稿 紆余曲折 人生いろいろ…社学もさまざま

社学入学で、良き師、良き友に恵まれ、意義深い人生に…

原田 高雄（1973年卒）

●早稲田奨学金を得て東大紛争時に社学入学

千葉県柏市にある麗澤高校という当時全寮制だった高校を卒業して早稲田大学社会科学部に入学した年、給付奨学金に応募し早稲田奨学金を頂くことができた。課題は〝早稲田大学と私〟という小論文だったと思う。

奨学金をもらったことを同じ高校のある先輩に話したら「原田君頑張ったね、おめでとう」と言われた後に「だけどその奨学金をもっと必要としている人が他にいるんじゃないかな」と何気なく言われ、そのことがずうっと頭のどこかに残っていた。

私は、麗澤高校の松本先生の推薦で東京青山の電子部品メーカー商社に2月13日に入社して既に正社員になっていた。家庭の事情で昼の大学には行かないと決めて就職していたのだ。

就職したJ社の社長さんが、「原田君、東京大学に行きたかったら昼間東大で勉強し夜会社で働いても良いんだよ」と仰って下さった。残念ながらその年度だ

難波田先生の最終講義テープとCDなど

け激しい学生運動、学園紛争で東大入試がなかったのでそう出来なかった……というのはお決まりの冗談で、数学の点数に難点があり国公立大学は無理だと判断していた。

一昨年長野県上田市にその先輩を訪ねたとき、その時の言葉（の真意）を訊いたら、「エッ俺そんなこと言った!?」とご本人は覚えてなかった。

●難波田春夫先生の最終講義をCDに

約２年前、カンボジアボランティア繋がりの友人から社学稲門会会長の阿川さんのことを聞きすぐ電話して新宿のオフィスを訪問した。

阿川さんの名前は以前から社学会報などで二水会会長として奨学金基金を立ち上げられ努力されていることは知っていて、阿川さんに尊敬の念を抱いていた。

その時「原田君、明日の晩 14 号館で社学稲門会の月例会があるので来ないか」とお誘いいただいた。行ってみると 30 人くらいの会員が社学創立 50 周年記念行事について熱心に議論していた。

その一環として奨学金集めも大々的やっていた。委員長は 73 年卒の川尻君、気さくな彼に誘ってもらい奨学金委員会幹事に加えてもらった。色んなアイデアを出す川尻委員長や他の幹事さんのお手伝いをしながら実行部隊として少しは貢献し恩返しが出来たかなと思う。

またちょうどその頃、阿川会長のもとに福島県郡山市在住の社学卒業生、佐藤浩次さんという学友から難波田春夫先生の大隈講堂における最終講義のカセットテープが届いた。阿川会長の依頼で CD にコピーするお手伝いをさせてもらい希望者 30 名程に実費でお分けすることができた。自分も久しぶりに難波田先生のお声と講演に感激した。

また寄付して頂いた方々、二百数十名へのお礼にそれを差し上げようという先輩の発案の実現にお手伝いできたのは大変嬉しかった。

●難波田先生の結婚式披露宴出席秘話

難波田春夫先生と言えば私には大きな思い出がある。在学中、先生の授業、社会科学方法論は学生必修科目で大きな階段教室の一番前で聴講していた。多くの学生の前で淡々とお話をされるお姿が今でも思い出される。

難波田先生のゼミには勿論興味があったが、私は仕事の関係で中内正利先生（当時日本実用英語学会会長）の商業英語をゼミの代わりに履修した。ゼミは必修科目ではなく当時の私には実学が優先だったのだ。

1973 年卒業後 1976 年末から会社の駐在でロサンゼルスにいた私は 1979 年一時帰国し藤村社長の仲人

難波田先生に来ていただいた結婚披露宴にて。友人余興のギターを聴いていただいているところです

ロサンゼルス駐在時代、1981 年にボストン出張時、家内親戚筋のライシャワー博士夫妻をご自宅に尋ねた時の一コマ

により伴侶を得て東京で結婚することになった。その時藤村社長から、博士や大臣とか大学の先生とか誰か君の主賓として披露宴に出席して頂ける方はいないかと尋ねられた。相手方との釣り合いから仲人として仰ったようだった。

私はとっさに難波田先生の顔を思い浮かべ、当時の永田町 TBR ビルの一室にあった先生のオフィスを初めて訪ねた。確か講談社だったかが、先生が執筆されたり研究をされたりする場所を提供していたと聞いた。先生は昔の一卒業生、聴講生の私のことを覚えておられることはなかったが、優しく出迎えて話しを聴いて下さり二つ返事で、結婚式披露宴出席いいよと仰って下さった。

披露宴当日の先生が主賓祝辞の開口一番、「私が本日ここで原田くんの結婚披露宴に何故呼ばれたかよくわからないところもあるんです云々」でスピーチが始まった。先生は冗談で仰ったと思うのだが、いや大らかな先生ならではのお言葉かもしれないが、私はひな壇で赤面、冷や汗だった。先生のスピーチはこの冒頭しか頭に残っていない。

●難波田先生から田村正勝先生へ

1983 年に駐在を終えて帰国した私は港区南青山本社勤務になり、後に難波田先生と田村正勝先生の主催しておられた麹町の食料会館での経済学研究会に出席させてもらうようになった。

毎月開催されていて難波田先生、田村先生が最初にお話、問題提起されたことを皆で議論し最後も先生がまとめていく方法だった。難波田先生のゼミ生だった方や勉強会に前から参加している人々の自信に満ちた発言などに押され気味だった私はなかなか手を挙げ発言の機会を得られず、聞くだけの方が多かった。

ある時先生を囲んだ飲み会で隣の席になった時、先生が私に、「原田君自分の意見を言うことは難しいね、考えがまとまったころには次の話題に移ってたりしてね、でも思い切ってやってごらん」と言って下さった。大勢の会員の中でそこまで自分のことを見ていて考えて下さったことに感激した。

爾来、他の種々の会合や研究会でも積極的に自分の意見を述べるようにしている。先生が亡くなられる前まで頂いたご厚誼は決して忘れる事ができない。

難波田春夫先生が亡くなられてからも田村正勝先生

2015 年夏、昭和記念公園トライアスロンのスプリント競技に出場時のスナップ

難波田先生の責任編集による「社会哲学」など

がロゴスの会を継承しておられ難波田先生を偲ぶ機会にも参加させていただいている。

私は早稲田大学社会科学部に入学したお陰で良き師、良き友　仲間に恵まれ、人生が意義深いものになっていることに感謝し、これからも社学稲門会の発展に少しでも寄与したいと思っている。

●原田高雄さんプロフィール

1950 年、新潟県生まれ。良寛など歌人、書家が晩年過ごされた五合庵、乙子神社のある国上にて。
地元中学卒業後、千葉県柏市にある麗澤高校へ。
1969 年、早稲田大学社会科学部入学、1973 年卒業。
製造部門を持つ電子部品の商社入社。28 年勤務の後、主に外資系企業 3 社に勤務、2015 年定年退職。

寄稿 紆余曲折 人生いろいろ…社学もさまざま

「ブー、ブー、ブー！」でバブルを謳歌した我が青春の日々

和泉 明宏（1990年卒）

●1986年入学、世はまさにバブリー！

一浪の末、憧れのワセダに合格して愛知県から上京してきたのが昭和の61年、西暦で言うと、1986年。本田美奈子の「1986年のマリリン」がやたらと流れていた年だった。そんな80年代後半。時代はまさにバブリー!!

大人が浮かれていたのだから、まだ20歳前後の若い僕等が浮かれないわけがない。世は第2次ディスコブームとやらで「マハラジャ全盛時代」。

田舎もので野暮ったい僕には全く関係ない世界かと思っていたら、田舎から一緒に出てきたこいつはイケメン系の酒井君が、「パーティーに来ない？」なんて早くも都会人の口調で言う。

明治学院大学に入学していた彼は、高校の頃から上京を夢見て、東京のことをいろいろと研究していたものだから、服装とか遊びとかが既にもう垢抜けていた。大学もスマートな学校にしか行かないと意に決していたようで、間違っても響きが今一つの馬場、早稲田なんかは願い下げだったようだ。

で、酒井君曰わく「ディスコに行くにはスーツがないと駄目だ」という。そんなこと言われても、当時、既に絶滅危惧種だった学生服姿で大学に通っていた僕には、スーツなんていうものがあろうはずもなく、しかも、上京早々、いろいろと物入りだからお金もない。

そうしたら、さすが親友。酒井君が持っていた若干、大き目ではあったけれど、黒のスーツを貸してくれて、それで六本木のもう名前は忘れてしまったけれどもディスコに連れて行ってもらった。

●ディスコで知ったユーロビート

初めて踏み入れたその地は別世界で、耳をつんざくような音楽と鼻をつく様々な香水の匂いにたちまちクラクラ……男がみんな格好良く見えて女はみんな美しくセクシーに見えた。多分、華美な雰囲気による幻覚だったのだろう。

酒井君は、俺踊ってくると言って、さっさとフロアー中央に歩み出ていったのだけれど、僕はなんだか、とても孤独というのか、急に寂しくなって、それは田舎者でお世辞にもこうした場所が似合うとは言えない自分が哀れで、この場で楽しく遊んでいるたくさんの若い人とは違うんだという疎外感を強くもったからで……。

でも、徐々に慣れてきた耳に入ってくる電子音を中心としたアップテンポの音楽には身体が自然と動いていくようなエネルギーを感じたのだった。それで、そのときはさっさと帰ったのだけれど、音楽が気に入ったので酒井君に尋ねてみると、「ユーロビート」とかいうダンスミュージックらしい。

Aメロ、Bメロ、サビ、Aメロ、Bメロ、サビの4拍子。シンプルで深みはないけれど中枢神経のどこかを刺激するのか、身体が熱く反応してついつい踊り出したくなる。

この時からなんとなくユーロビートのCDをジャケ買いするようになっていた。

●良き後輩に恵まれ遊び三昧の日々を…

そうこうしているうちに、ワセダでの大学生活も2年になって後輩が出来るわけだけれど、その中に今で

写真左が筆者（和泉さん）で、右が後藤事業委員長です。
大学２年生のサークル追い出しコンパだったと思います。
「結構、いい男でしょ（笑）」

は建築事務所を経営する、現事業委員長の後藤君がいて、彼も先の酒井君と同様、とても垢抜けているというのか、都会派学生といった雰囲気が違和感なくフィットしていて、慶應の学生といってもおかしくはない存在だった。

後藤君も田舎者の僕に優しくしてくれて、たくさんのユーロビートの曲をカセットにダビングして持ってきてくれた。

六本木のディスコは敷居が高いと言うと、新宿「ゼノン」へ連れていってくれたりして、これではどっちが先輩かわからないが、まあ、適材適所（誤用かな）というわけで、それぞれの得意分野を活かせばいいと都合よく解釈して、結局、後藤君には何もしてやれなかったけれども、妙な上下関係を構築していったのだった。

他にも後藤君はたくさんの合コンも持ってきてくれて、まさに至れり尽くせり。いい後輩を持ったものだと、感謝している。住んでいた所もともに田無（現西東京市）でいろいろと若気の至り的失敗談も多いのだが、とてもここには書けない。

●和泉明宏さんプロフィール

愛知県立半田東高校出身。1986 年入学 1990 年卒。
在学中は近代会計学会という勉強すべきサークルに所属していましたが、合コン、麻雀、DISCO、ビリヤード等々遊んでばかりいました～典型的なダメ学生でしたね。
今は、一応、金融関係の仕事に就いてます。

現在の和泉氏（左）と後藤事業委員長

とにかく大学時代は遊んで、遊んで、遊んで。適当に卒業すれば、就職だってどこかしらあるだろうしなんて呑気に考えることが許された使い物にならないバブル世代である。

今でも仕事でストレスがたまると気分だけはバブリーになりたくて、後藤君が教えてくれた多くの「ユーロビート」MUSIC を聴いて、わずかばかりの時間、現実逃避を図っている。

●おススメ・ユーロビートソング

最後に、我がおススメ・ユーロビートソングを紹介して、この駄文の結びとさせて戴く。

これぞ、まさしくブー！ブー !! ブー !!!
PAUL LEKAKIS
“BOOM BOOM（Let’s go back to my room）”

新宿東亜会館ではこの曲だったなあ～。
Hot Gossip
“Break Me Into Little Pieces”

彼女と盛り上がってきたときのこれ！
SOPHIE
“SAME”

定番中の定番！
Shy Rose
“I Cry For You”

寄稿 東日本大震災復興支援イベント探訪

「REBORN ART FESTIVAL 2017」を訪れて

伏見 英敏（1983 年卒）

■復興進む故郷・石巻市の変貌ぶりに…

日本はもともと自然災害の多い国ですが、ここ数年でも広島の集中豪雨、御嶽山の大噴火、茨城県常総地区の台風による水害、そして昨年の熊本の大地震、今年に入って九州北部の豪雨と枚挙にいとまがありません。

私の出身地、宮城県石巻市は、2011 年の東日本大震災によって大きな打撃を被った地域です。一昨年の会報 18 号にも『東日本大震災被災地復興支援について』寄稿しましたが、今回も 6 年半経過しようとしている現地の様子を一部お伝えします。

母校・石巻高校のある日和山という丘に登ると南側に北上川の河口と、その先の太平洋が見渡せます。右手（西）に松島、左手（東）に牡鹿半島の見える日和山公園の眼下には、門脇町や南浜町の街並みが続いていたのですが、現在では雑草の生える広大な空き地と化しています。翻って北側には、北上川の中瀬の石ノ森萬画館や中心市街地の一部が見渡せます。

まだ至る所に津波の傷跡が見られますが、復興マンションや新しい商店、飲食店が建ちはじめ幾分にぎやかさが戻ってきたようです。ただ、映画館や本屋が郊外のショッピングセンターに移ったままなので日中の立ち寄り場所がなく、街中を闊歩する若者の姿が少ないのは残念です。

日和山公園から太平洋を臨む

車で牡鹿半島や沿岸部に出かけると、人の姿はあまり見かけないのですが、トラックの往来が多いのに驚かされます。漁業集落防災機能強化事業と称する高台移転や嵩上げ工事がいまだに終わっていない上に、高層防潮堤の建設が進んでいるためです。1000 年に一度と言われる大津波を経験すると、どうしても備えが厳重にならざるを得ないというのは理解できますが、時間がかかり過ぎて人口流出に拍車をかけてしまった

背の高い防潮堤

「はまさいさい」の日替わりメニュー

という点は否定できません。

地震や津波という自然の脅威と隣り合わせにありながら海と暮らす住民、そしてその地域に愛着を持って暮らす住民の意思をくみ取りながら安心・安全と暮らしを守る方法は他になかったのか……。復興に向けての公共工事が盛んに行われているにも関わらず、嵩上げや防潮堤工事によって故郷の風景が大きく変わっていく現実に空虚さを感じずにはいられませんでした。

■復興を象徴するイベントが開催されて

そういった中で応援してくださるたくさんの方々のお力添えを得て、石巻や牡鹿半島が復興に向かって歩みだしたことを象徴するようなイベントがこの夏、開催されています。サザンオールスターズやMr.Childrenの音楽のプロデュースを手がけた小林武史氏の主宰するapbankが彼の地を舞台にReborn-Art Festival（2017年7月22日～9月10日）を開催しているのです。

「はまさいさい」のお母さんたち

地方型の芸術祭と言えば、新潟県・越後妻有の「大地の芸術祭」や「瀬戸内国際芸術祭」が有名ですが、先輩格の芸術祭と比較するには今後の実績を積む必要があります。こちらは、ARTとMUSICとFOODの三位一体が底流を通じるコンセプトのようです。

単にART作品を展示するだけでなく、会期51日間中、毎日（石巻や牡鹿半島の）どこかで音楽（予定されていないライブ）が鳴っているプラグラムです。

そして料理界では知る人ぞ知る腕利きのシェフたちと浜のお母さんたちのコラボレーションで、地元の食材を活かしたお料理を楽しむことができます。

■印象に残ったアート作品

限られた時間の中では全ての芸術作品は見て回れませんが、とても印象的だった作品を紹介します。

一つ目は、牡鹿半島の中ほどにある荻浜小学校（現在休校中）の倉庫にパルコキノシタさんの手彫りの木造が飾ってあります。石巻市で被災した死者および行方不明者の総数である3978体の像を会期中も彫り続けるインスタレーション作品で「震災で亡くなったりいなくなったりしていなくて、本当はみんなここに『います』という場所を作りたかった」とパルコキノシタ

パルコキノシタさんの作品『います』

さん。

次に牡鹿半島の突端に浮かぶ信仰の島『金華山』を臨む御番所公園付近には、いくつかの芸術作品が点在していますが、中でもあの草間彌生さんの作品は目を惹きます。

《真夜中に咲く花》のシリーズの一部のそれは、草間作品の象徴ともいえる「水玉」に覆われた大きな目を持つ花の彫刻作品で、独特の存在感を持ち、見ているこちらが覗き込まれそうな感覚を覚えます。またこの御番所公園からは金華山だけでなく、網地島や猫島として有名になった田代島も見えます。さらにその先には、さえぎる物のない太平洋が広がり雄大な景観を楽しめます。

■地域の拠点として誕生した牡鹿ビレッジ

半島中部には、海と山に寄り添い地域の価値を再発見し、そして活かし伝えていくための拠点として『牡鹿ビレッジ』が作られました。

ここには前述した地元の浜のお母さんたちが地元の食材を使って気取らない郷土料理や創作料理を提供する食堂「はまさいさい」があります。また「はまさいさい」から岬の灯台までの道を歩いて 10 分くらいのところには、「Reborn-Art DINING」というレストランがあり、主に週末には全国の有名シェフが入れ代わり立ち代わり駆けつけ牡鹿の食材を使ってスペシャルな料理を提供してくれるそうです。

このレストランの近くには牡蠣殻の白い浜辺があり、そこには 6 メートルを超える白い鹿の彫刻が展示されています。名和晃平さんの《White Deer (Oshika)》と呼ばれる作品で、天候や時刻によって表情を変えます。

解説文では、『鹿は古来から「神使」や「神獣」と

「牡鹿ビレッジ」の牡蠣殻の浜辺に立つ白い鹿

草間彌生さんの『真夜中に咲く花』

して、アニミズムや神道などの信仰のなかで親しまれてきた。近年日本では、鹿が増え続けており、人里に時々現れる鹿は、「迷い鹿」と呼ばれる。《White Deer (Oshika)》は、インターネット上に現れた「迷い鹿」（鹿のはく製）を取り寄せ、３Ｄスキャンして得たデータを元に制作された。牡鹿半島・荻浜に立つその姿は遠くの空を見上げ、旅の原点である瀬戸内海・犬島の方（南西）を向いている』とあります。

瀬戸内国際芸術祭の会場のひとつである犬島には名和さんの作品もあり、そちらの方向（南西）を向いているのだそうです。青い海と空、緑の森、そして巨大な白い鹿のコントラストは、訪れる人に何らかの感銘を与えることと思います。

■実行委員長・小林武史さんの思い

実行委員長の小林武史さんは、「もとには戻れない部分もたくさんあるけれど、もしかしたら震災以前にはなかった良さが生まれてくる可能性がある」と、この芸術祭を実施する意義を語っています。

私たちが生まれ育った故郷は姿を変えてしまいましたが、Reborn-Art Festival を契機に地方と都会との『人や文化や経済の循環』が回り始めれば、復興の歴史に大きな足跡を残すものと感じました。

私も震災の記憶や被災者の思いを風化させず、微力ながら復興支援を続けていきたいと思っています。

石巻や牡鹿半島など三陸地方は、風光明媚で魚介類などの食材も豊富なところです。芸術祭は来年以降も継続的に開催されますので、皆様も是非お運びいただき、楽しんでいただければ幸いです。

「牡鹿ビレッジ」で歌う小林武史さん

編集後記

なんだか長い梅雨が続いているような夏でしたね。
今回はインタビューや自分の寄稿の他に校正作業を担当しました。編集メンバーも寄稿依頼を受けた方も、みな忙しい中での作業でしたが、立派な 20 号記念号ができたと思います。
次回は寄稿依頼があなたのところへ届くかもしれません。是非、ご快諾をお願いします。
（伏見英敏）

原稿締切近くは本来の仕事に加えての作業なので慌ただしかったですが、無事に第 20 記念号をリリースできてホッとしています。
ご寄稿頂きました皆様のおかげで読み応えのある素晴らしい記念号となりました。衷心より御礼申し上げます。編集スタッフの皆さんもお疲れ様でした。（吉田直人）

夏の高校野球は、花咲徳栄高校が埼玉県勢初の全国優勝となり、同じ県人としては嬉しい限りです。
20 回目の記念号も無事にリリースですが、数ある稲門会の中でも、早稲田学報に次ぐ、進取の精神に富んだ会報ではないでしょうか？
諸先輩のご尽力と、寄稿されました方々へ改めて感謝申し上げます。（追伸：ゴルフやる方！　御連絡お待ちします！）　（西宮正明）

しばらく早稲田から遠ざかっていましたが、2 年前の社学 50 周年関連のイベントに参加し、縁あって「社学稲門会」に参加させていただくようになって約 1 年……。
広報委員のお手伝いもさせていただくようになり、今回初めて会報の編集（編集委員）に携わらせていただき、まだまだわからないことだらけですが、先輩諸氏に助けていただきながら無事に第 20 号の記念号を発行することができました。
これからも微力ながらお役に立ちたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。（新谷俊樹）

編集担当

川端光明（S54 年卒）西宮正明（S57 年卒）
伏見英敏（S58 年卒）吉田直人（S63 年卒）
新谷俊樹（H3 年卒）野口　淳（H13 年卒）
関根健児（H16 年卒）佐藤英明（H18 年卒）
下地彩子（H18 年卒）

発行　「社学稲門会」編集委員会
発行人 早稲田大学社会科学部稲門会
〒 160-0022
東京都新宿区新宿 3-11-6　エクレ新宿 11F
阿川グループ 阿川功 気付
TEL.03（5368）2245 FAX.03（5368）2246
E-mail：info@syagakutomonkai.com
http://syagakutomonkai.com/

早稲田大学「社学稲門会」ホームページ

http://syagakutomonkai.com/

このホームページでは、「社会科学部卒業生奨学金」制度の概要、基金の収支、活動の近況などを報告しています。また、この運動を支えている OB・OG の会＝二水会（毎月第２水曜日に打ち合わせ）の活動、親睦の報告なども紹介しています。なお、この「会報」のバックナンバーについても、今後掲載を予定していますので、ご期待いただければと思います。ぜひ、一度アクセスしてみてください。

「Facebook,Twitter」
もご活用ください！

「社会科学部創設50周年記念事業」

井深記念ホールで開催された 50 周年記念事業

恒例の校歌斉唱でのフィナーレ